

一般社団法人 日本生態学会

ニュースレター

No.66

2025 年 5 月

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 72 回日本生態学会札幌大会（ESJ72）開催報告	5
記事	
Ⅰ. 一般社団法人日本生態学会 2025 年度定時総会、 代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項	10
A. 報告事項	10
B. 審議事項	20
Ⅱ. 第 72 回日本生態学会大会の記録	27
Ⅲ. 業務執行理事の選任について	31
Ⅳ. 代議員の欠員補充について	31
Ⅴ. 寄附一覧	31
Ⅵ. 書評依頼図書	31
書評	32
日本生態学会役員・代議員・委員一覧	38
京都大学生態学研究センターニュース	42

日本生態学会各賞候補者募集

第24回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第30回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第19回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第14回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

第3回「日本生態学会自然史研究振興賞」

生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本学会の会員を対象とした賞です。自薦による応募者もしくは本学会会員により推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
3. 送付先：
（電子メール） office@esj.ne.jp
（郵送） 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
（〇〇は応募する賞名を入れて下さい）
4. 締め切り日：2025年8月18日（月）必着

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

- 第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会自然史研究振興賞規則

- 第1条 日本生態学会自然史研究振興賞は、生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2件とする。
- 第2条 自然史研究振興賞受賞候補者を選考するため、自然史研究振興賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により4名を選出する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は2年以内とし、毎年2名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 72 回日本生態学会 札幌大会 (ESJ72) 開催報告

高橋 一男 (ESJ72 大会企画委員会 企画委員長)

2025 年 3 月 15 日から 18 日まで、札幌コンベンションセンターをオンサイト会場として第 72 回日本生態学会大会 (ESJ72) が開催されました。ご参加頂いた皆様に感謝を申し上げます。ESJ72 では、ハイブリッド大会として開催された横浜大会 (ESJ71) で得た教訓を踏まえ、オンサイトを基本としつつ、一部の講演についてはオンライン配信する新形態に挑戦しました。大会のオンサイト開催の要望が多い一方で、講演のオンライン配信を必要とする声もある中、最適なハイブリッド大会のあり方を模索し、大会の準備に尽力くださった実行委員会、企画委員会の皆さまには多大なご貢献を頂きました。大会にご参加頂きました皆さまにも感謝申し上げます。本稿では、ESJ65 以来の札幌開催となった ESJ72 の成果と見えてきた課題について、(1) 開催概要、(2) 新しい試み、(3) 参加者評価、(4) 今後の展望の順に振り返りたいと思います。

(1) 開催概要

ESJ72 は、2025 年 3 月 15 日から 18 日までの 4 日間は札幌コンベンションセンターをオンサイト会場として、また 3 月中旬から 4 月 8 日までは ONLINE CONF をオンライン会場として開催されました。基本方針は、オンサイトを軸としたハイブリッド大会で、オンラインのみのポスター発表を除く全ての発表がオンサイトで行われました。オンラインではポスター発表、高校生ポスター発表の掲示、受賞講演や一部のシンポジウムのライブ配信に加えて、多くの集会系企画のオンデマンド配信が行われました。

オンサイト会場である札幌コンベンションセンターは道内最大級のコンベンションセンターで、大ホール、特別会議場、中ホール、小ホールに加えて 15 個の会議室で構成されています。新千歳空港や札幌市内からのアクセスも良く、まだ積雪のある 3 月の札幌での大会ではありましたが、参加者の皆さまにも利便性の良さを実感して頂けたのではないかと思います。実行委員会のご尽力により、この札幌コンベンションセンターを全館貸切で利用できました。4 日間の大会期間ではありましたが、全ての講演に会場を割り当ててオンサイト会場運営が行えました。特に、

広さ約 2600 m²の大ホールをポスター会場として利用できたため、希望者全員のオンサイトポスター発表を実現することができました。

オンライン会場としては、オンラインプラットフォーム (ONLINE CONF) を採用しました。ESJ69 以来大会のオンラインプラットフォームとして活用されてきており、ESJ 用に様々な機能がカスタマイズされている点、ESJ 参加者も使用に慣れている点などの利点を重視しました。大会のスケジュール、各講演情報の掲示に加えて、講演のライブ配信やオンデマンド配信、参加登録、名札や領収書の発行、各講演へのコメント、講演者へのメッセージの送受信など、参加者の皆さまには大会の様々な場面で活用頂きました。

大会にはオンライン、オンサイト含めて合計 2471 名の参加がありました。申し込み数は、シンポジウムが 17 件、自由集会が 28 件、フォーラムが 10 件、口頭・ポスターを併せた一般講演が 1189 件、高校生ポスターが 62 件で、前回の札幌大会 (ESJ65) に匹敵する多くの方にご参加頂きました。ONLINE CONF については、3 月 15 日～18 日のオンサイト期間中の合計ページ閲覧数が 102113 回、合計ページ訪問ユーザー数は延べ 66517 人となりました。オンサイト期間終了後 (3 月 19 日～4 月 8 日) の合計ページ閲覧数は 20450 回、合計ページ訪問ユーザー数は延べ 25705 人となり、オンサイト期間中にも、その後も、多くの利用がありました。また、オンデマンド配信動画は合計 2713 回再生されており、オンデマンド配信に一定のニーズがあることも改めて確認できました。

(2) 新しい試み

ESJ72 では従来 5～6 日間だった大会をオンサイト開催 4 日間に短縮しました。理由の一つは、会場利用料の削減による、大会支出の削減です。ハイブリッド形式での大会では、オンサイト会場の利用料とオンラインプラットフォーム利用料の両方の支出が必要になります。会場利用料は大きな大会支出項目の一つですので、会場利用日数を 1 日減らすことは、大会参加費の抑制のためにも大きな効果が

あります。今回は、札幌コンベンションセンターに十分な講演会場数があり、4日間で予定していた全ての講演が収容可能と予想できたことと、一部の講演のオンデマンド配信により、講演の並列化もある程度までは許容されと考えられたため、このような決断をしました。大会期間の短縮は、会場利用料の削減に加えて、大会運営労力の削減や参加者の滞在費や出張期間の削減にもつながりました。大会後のアンケートでは、ESJ72のオンサイト開催期間を4日間としたことについて、86%の参加者から支持されました。会場の大きさや、大会のハイブリッド化の程度にも依存しますが、状況が許せば今後のESJの大会においても、オンサイト開催期間を4日間とすることも選択肢に入れて良いと思いました。

ESJ72は、開催形式をオンサイトを基本としたハイブリッド形式としました。近年の大会を振り返ると、ESJ68、ESJ69、ESJ70の3大会はオンライン大会として開催され、ESJ71は前半2日は完全オンライン、中日以降はハイブリッドという形式で開催されており、ESJ72ではこれらとは異なる開催形式を採用しました。大会の開催地や開催時期の世情その他によって、大会の最適な開催形式は異なると思われます。ESJ72では、実行委員会のご尽力により、かなり早い時期に十分なキャパシティーを持つ札幌コンベンションセンターを確保して頂きましたので、完全オンサイトのみでの大会開催も可能な状況の中、大会の開催形式について検討が行われました。新型コロナウイルスの5類感染症移行後、大会のオンサイト開催が可能な状況となり、オンサイトでの大会開催を求める声も大きかったため、オンサイトでの開催は前提として、オンラインの要素をどの程度含めるべきかという点が検討の核心部分となりました。過去のオンライン大会やハイブリッド大会の状況を見ると、様々な事情により物理的にオンサイト会場への移動が難しい参加者、オンサイト参加の時間が確保できない参加者があり、そういった参加者にとってオンラインでの大会参加は大きな意味を持ちます。また、オンラインでの大会参加は、学会に参加したことの無い学部生にとっては、参加費無料で、移動や宿泊の必要無く一部の講演を視聴できる機会になるため、新規の学生会員獲得の機会にもなり得ます。このような点を考慮して、オンライン参加でも充実した大会参加体験が可能な形式を目指して検討・調整が行われました。その結果、ポスター発表はオンライン発表必須で、希望者は全員オンサイト発表可能、受賞講演や一部のシンポジウムはライブ配信が行われ、全てのシンポジウムと、希望のあった自由集会とフォーラムについてはオンデマンド配信を行う形となりました。ESJ72では、ライ

ブ配信とオンデマンド配信に掛かる支出を考慮して、全9会場のオンサイト会場の内、5会場に現地業者に入って頂き、この5つの会場でオンデマンド配信用動画の撮影、1会場ではライブ配信を行う形となりました。また、支出上の制約から、一般口頭発表はオンサイト発表のみとなりました。このような形式を採用したことで、オンサイトの参加者はコロナ禍以前と同様の大会経験が可能となりました。また、後日オンラインコンテンツ（オンラインポスターや、受賞講演、集会のオンデマンド配信など）も利用可能となり、交流と情報収集の幅がより広がったのではないかと思います。オンライン参加者にとっては、3月15日～18日の間、ライブ配信のコンテンツが毎日視聴可能となり、大会のライブ感を感じることができたのではないかと思います。また、オンサイト大会期間から4月8日まで、オンラインポスターや受賞講演や集会のオンデマンド配信の視聴が可能となり、学会参加のための時間の確保が難しい状況でもオンサイトでの大会参加体験に近い体験ができたのではないかと思います。実際、大会後のアンケートでは、ESJ72のハイブリッド形式が望ましいという回答が56.7%、更にハイブリッド化を進めて全ての講演のハイブリッド化が望ましいという回答が29.8%となり、ESJ72と同様またはそれ以上にオンライン要素を強化したハイブリッド形式を支持する回答が86.5%となりました。このように、参加者からは好評を頂いたオンサイトとオンラインの両方を充実させたハイブリッド大会ですが、実際には大会支出の増加と、それに伴う発表編成の制約などの大きな課題もありました。前者については、オンサイト会場の利用料とオンラインプラットフォーム（ONLINE CONF）の利用料が両方必要になるため、最終的には参加費の値上げに繋がりました。後述しますが、アンケートの結果、ESJ72の参加費を高いと感じた参加者も多くいました。大会として提供するサービスが充実すればその分コストが増してしまいますので、今後最適なバランスを模索する必要があります。個人レベルで見れば、オンライン大会としてのコンテンツが充実すれば、参加費が高くなったとしても、交通費や宿泊費無しで大会参加体験が得られるため、総合的なメリットが大きくなるケースもあるかもしれません。大会と個々人の関わり方によって様々な意見のある点であるため、必ずしも多数決によらない慎重な検討が必要だと思います。また、ESJ72ではコスト削減のために現地業者にオンデマンド配信動画の撮影をお願いする会場数を限定しました。その結果、例年とは異なり、シンポジウムや自由集会の多くを一部の会場に固めて配置することになり、一般口頭発表との講演時間の重複を許容した

発表編成とせざるを得ませんでした。全会場に業者を配置してのオンデマンド配信を行えば、このような発表編成の制約は無くなりますが、大会支出を考えると難しい点です。大会での発表編成は、大会参加の満足度に大きく影響する要因であるため、大会のハイブリッド化を検討する際に、特に考慮すべき課題と思います。

(3) 参加者評価

ここでは、大会後のアンケートの結果を私の主観で簡単に振り返りたいと思います。まず、アンケートにご回答頂き、貴重なご意見をお寄せ頂いた 171 名の参加者の皆さまに感謝を申し上げます。

ESJ72 全体の満足度を 10 段階で伺った結果、7 以上のご回答が 84.2%となり、多くの参加者が一定程度の満足を感じていたことが分かりました。この回答の理由としては様々なご意見が寄せられていましたが、オンサイトの会場、運営、体験を評価するご意見が多く、それに加えてオンラインコンテンツの充実を評価する声もありました。多くの参加者の皆さまが、ハイブリッド大会を楽しまれた結果を反映しているものと思いました。

大会のハイブリッド形式のありようについての 3 つの質問についてそれぞれ最も多かった回答は以下の通りでした：全体的に ESJ72 の形式が望ましい (56.7%)、一般口頭発表はオンサイトのみでも良い (45.6%)、集会系のイベント（シンポジウム、フォーラム、自由集会）はオンサイト必須のハイブリッド形式で特に問題無い (70.2%)。また、各質問において、次点となった回答はオンライン要素を強化する方向での回答となりました。このことから、多くの参加者が ESJ72 におけるハイブリッド形式を妥当と考えており、更なるオンライン要素の強化（全講演のオンデマンド化や、オンラインでの発表も可能とする）を望む意見も多く見られました。この回答の理由としては、やはり様々なご意見が寄せられていましたが、オンデマンド配信の利便性を評価する声とともに、ESJ72 では原則として採用しなかったオンラインでの発表の要望が多く見られました。Zoom 等を用いたオンライン発表は、会場 PC との接続トラブル、音声トラブルなど、運営上の多くの課題が予想されます。生態学会の規模の大会でのオンライン発表の実施には大きな労力とコストが必要となると思われるため、ESJ72 では、講演は原則オンサイトのみとしました。今後、オンサイト会場においてオンサイト発表とオンライン発表の両方を実施する際には、会場でのトラブルをいかに低減するかが課題になると思われます。

ESJ72 のオンサイト大会開催期間を 4 日間としたこと

について、多くの参加者にご支持頂いたことは上述の通りですが、ESJ の大会全般について、望ましい大会期間についてもアンケートで質問をしました。その結果、上位 3 つの回答が、4 日 (62%)、5 日 (25.7%)、3 日 (8.8%) となり、5～3 日間が望ましいとする意見が 96.5 %となりました。オンサイト大会期間が長い方が、日程的な余裕も生まれ、より多くの講演を現地で聴講可能となりますが、それと同時に参加者側のコスト（時間の確保、滞在費など）も増大してしまうという事かもしれません。オンサイト大会期間の短縮は運営コストの削減にもつながりますので、適切な短縮化は運営側と参加者側の双方に利益をもたらすと思われます。ただし、大会の開催場所や大会会場の都合により、従来通りのプログラムを全て盛り込むためには一定期間以上のオンサイト大会期間が必要となる場合があります。ESJ72 では、オンサイト会場のスペースに十分な余裕があり、短期間に多数の講演を収容できたことと、集会系イベントのオンデマンド配信により、講演の並列化が許容されるという前提があったため、オンサイト大会期間 4 日間を実現することができました。オンサイト大会期間の短縮化は、今後の大会のあり方として検討に値する方向性だと思いますが、大会の運営や企画にはそれに優先しなくてはならない事項が有りうると思います。

ESJ72 の大会参加費は一般 19000 円(早期 17000 円)、学生 9500 円(早期 8500 円)でしたが、アンケートの結果では、妥当だと言うという意見が 36.3%に対して高いと思うという意見が 62%となっていました。ESJ72 では高騰する会場利用料に加えて、オンラインプラットフォームの利用料、現地でのライブ配信、オンデマンド配信料などが主要な支出となり、ESJ71 と比較して一般で 4000 円、学生で 2500 円の値上げとなりました。ただし、ESJ72 の大会の収支は赤字となっていますので、支出に対して過剰な参加費の設定になっていた訳ではありません。ESJ72 の参加費を「高い」と感じた参加者の中には、過去の参加費と比較して高いと感じた方、個人的に学会参加費に支払える金額と比較して高いと感じた方がいらっしゃったかと思います。また、ESJ72 に、ご自身ではあまり利用しなかった部分があったために、無駄がある＝高いと感じた参加者の方もいらっしゃったかと思います。近年、会場利用料を含めて、大会運営にかかわる様々なサービス利用料が値上がり傾向にあります。そのため、過去の大会と同じ内容で運営を行っても、大会支出の増大を通して参加費の値上げの必要があるケースは今後増えてくるのではないかと思います。その上で、参加者の皆さまが大会参加に支払える上限の金額も存在していると思われます。ESJ71 終了後の

アンケートで、ハイブリッド大会に支払える参加費の上限金額に関する質問があり、この回答結果から、ESJ72における一般参加費の上限を20000円と想定して準備を進めてきました。様々な調整を行うことで、ギリギリ想定上の上限金額内に収めることができました。上述の通り、ESJ72ではハイブリッド形式の大会を評価する声がある一方で、その運営に必要な支出を反映した参加費を高いと感じる参加者が多かったのも事実です。今後の大会運営では、参加者の皆さまのニーズを出来るだけ把握して、必要と思われる要素を重点的に残した大会のスリム化は必要と思います。その上で、大会が提供するサービスの充実度と大会参加費には強い関係があることを参加者の皆さまにもご理解頂いた上で、継続して適切なバランスを模索する必要があると思いました。

以上の内容に加えて、アンケートでは多岐にわたるご批判のご意見も頂きました。貴重なご意見として今後の大会運営に活用させていただきます。どうもありがとうございました。

(4) 今後の展望

ESJ71での初のハイブリッド大会運営で見つかった課題やその改善案を参考にして、改めてハイブリッド大会のあり方を考えて実施したESJ72でしたが、ハイブリッド大会としてある程度の成功を収められたのではないかと思います。オンサイト会場に一定以上のキャパシティがあることが必要ですが、今後のハイブリッド大会のモデルとなる大会となったのではないかと思います。その一方で、長年の大会運営の課題となってきた、大会運営負担の軽減に関しては、まだまだ改善の余地があると感じました。企画委員会でも、毎年運営の効率化に向けた取り組みを続けており、細かい部分では様々な改善が行われています。例えば、ESJ72ではオンラインポスター（一般と高校生いずれも）の提出を必須として、オンラインでのポスター賞・高校生ポスター賞審査を行うことで、オンサイト大会期間前に審査を行うことが可能となりました。この方式により、オンサイト大会期間中に審査、結果の集計等を行う必要がなくなり、ポスター部会員、高校生ポスター部会および審査員の皆さまの負担の軽減につながったと思います。ただ、ハイブリッド大会の運営では、オンラインプラットフォームの運営会社との交渉を含め、オンサイトのみ的大海にはなかった膨大な業務が発生しており、企画委員会の業務負担は相当なものでした。大会の準備・運営全体にかかる労力を考えると、抜本的な改革が必要な状況であると思います。外注可能な業務については可能な限り外注するという

のは一つの負担軽減策ではありますが、当然大会支出の増大につながりますので、大会そのもののスリム化や、参加費の値上げとセットで検討する必要があります。現在、大会運営改革タスクフォースが立ち上がり、中長期的な大会運営についての検討が始まりつつあります。今後のESJの大会が、運営側にも参加者側にも、より良いものなることを期待したいと思います。

謝辞

最後になりましたが、大会の準備と運営にあたり、ご協力頂いた方々に厚く御礼申し上げます。全員の名を挙げることはできませんが、特にご尽力頂いた方々の名前を挙げさせていただきます。

仲間雅裕さん（大会会長）、小泉逸郎さん（大会実行委員長）、内海俊介さん（大会実行副委員長）をはじめとする実行委員会のみなさま、企画委員会の門脇浩明さん（大会企画副委員長）、橋本洸哉さん（運営部会長）、伊藤公一さん（同副部会長）、佐藤永さん（シンポジウム部会長）、槻木玲美さん（同副部会長）、西嶋翔太さん（ポスター部会長）、松村健太郎さん（同副部会長）、山崎曜さん（高校生ポスター部会長）、辻冴月さん（同副部会長）、福井翔さん（発表編成部会長）、大庭ゆりかさん（同副部会長）、小林真さん（英語口頭発表部会長）、安立美奈子さん（同副部会長）、深谷肇一さん（オンライン部会長）、山北剛久さん（同副部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、ESJ72タスクフォース、学会執行部、事務局のみなさまに心から感謝いたします。

また、各種審査員を務めてくださったみなさまにも感謝申し上げます（順不同、敬称略）。皆さまのご尽力に改めて御礼申し上げます。

ポスター賞：

大門純平、上野尚久、片山歩美、阿部晴恵、伊藤陽平、檀浦正子、大西尚樹、中村亮介、松橋彩衣子、中西康介、野下浩司、中村直人、三浦彩、遠藤優、柴崎祥太、内田葉子、伊藤健彦、大東孝充、鈴木華実、直江将司、岡宮久規、大津千晶、石田祐子、深川幹、目戸綾乃、矢崎英盛、森田健太郎、牧貴大、阿部博和、太田謙、中村彰宏、武田和也、石濱史子、田村大也、栃木香帆子、上森教慈、久米篤、槐ちがや、近藤湧生、北村系子、吉川正人、斎藤昌幸、伊藤浩二、熊野了州、田和康太、山口幸、矢井田、石川尚人、村中智明、福山伊吹、濱尾章二、井上智美、内海邑、石田

拳、栗山武夫、東若菜、風間健宏、中原亨、羽田泰彬、佐藤光彦、栗原洋介、北出理、田中草太、中井静子、京極大助、金尾太輔、日室千尋、小泉亮子、三浦真紀、小宅由似、吉田直史、柴田銃江、鈴木牧、藤田博昭、徳田誠、藤井佐織、平野侑、辻井悠希、中田泰地、鈴木まほろ、佐々木章晴、上村真由子、佐伯いく代、田中健太、三木健、高野（竹中）宏平、細木拓也、西野貴子、鈴木紅葉、今藤夏子、中濱直之、本郷峻、東川航、吉村友里、佐藤幸恵、長谷和子、岡村悠、森井清仁、山田由美、村岡裕由、鍋嶋絵里、木村圭一、飯島大智、吉村真由美

高校生ポスター賞：

Wu Qianqian、大貫溪介、石黒智基、古澤惇平、佐藤安弘、小林正樹、廣部宗、宮崎祐子、榎本孝晃、庄司森、小峰浩隆、目戸綾乃、鈴木碩通、大竹裕里恵、伊藤陽平、日下部玄、和久井彬実、大崎晴菜、勝原光希、藤岡春菜、菊池顕生、松浦輝尚、北出理、松本哲也、仲澤剛史、宮田理恵、久野真純、駒田夏生、岩崎藍子、大友優里、川津一隆、遠藤優、矢追雄一、辻冴月、山崎曜

英語口頭発表賞：

三木健、山道真人、立木佑弥、佐藤安弘、徳田誠、辰巳晋一、大竹裕里恵、金尾太輔、瀧本岳、佐藤幸恵、太田菜央、前田玉青、中川光、宮園誠二、辻和希、境優、奥崎譲、岩井紀子、奥山雄大、Stephan Hotes、辻井悠希、宮沢良行、青柳亮太、片渕正紀、竹内やよい、小山耕平、木下こづえ、松葉史紗子、南佳典、佐伯いく代、内田健太、饗庭正寛、Isaac Planas-Sitja、永光輝義、京極大助

記事

Ⅰ. 一般社団法人日本生態学会 2025 年度定時総会（第 72 回大会会員総会、2025 年 3 月 16 日、代議員 22 名・会員 73 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A 報告事項

1. 事務局報告

a. 2024 年度会員数・学会誌発行状況

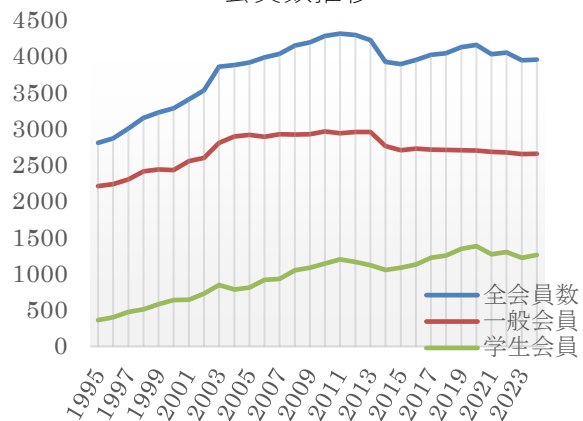
会員数（各年 12 月末現在）

	2023 年			2024 年		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	252	127	379	252	124	376
東北	171	95	266	168	98	266
関東	986	409	1395	987	437	1424
中部	350	142	492	361	153	514
近畿	460	299	759	458	285	743
中四国	184	63	247	183	75	258
九州	217	83	300	211	83	294
外国	32	6	38	37	6	43
小計	2652	1224	3876	2657	1261	3918
賛助			65			32
名誉			7			7
小計			72			39
合計			3948			3957

会費納入率（各年 12 月末現在）

	2023 年		2024 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	94.4	72.4	94.0	69.4
東北	95.3	84.2	92.9	80.6
関東	94.6	77.0	94.8	76.9
中部	94.0	73.2	96.1	74.5
近畿	95.2	76.6	95.4	74.7
中四国	94.6	79.4	94.0	86.7
九州	95.4	75.9	93.8	68.7
海外	84.4	50.0	86.5	83.3
全体	94.6	76.5	94.7	75.7

会員数推移



日本生態学会誌 74 巻

	1 号	2 号
発行部数	320	320
配本部数	309	270
残部数	11	50

保全生態学研究 29 巻

	1 号	2 号
発行部数	800	
配本部数	773	
残部数	27	

* 29 巻 2 号は 2025 年 3 月下旬～4 月上旬発刊予定

b. 庶務報告（2024 年 3 月～2025 年 3 月）

- 日本学術振興会より令和 6 年度科研費（国際情報発信強化 OA 刊行支援）の採択通知があった（3 月 22 日）
- 法務局に 2024 年定時総会にて就任した代表理事・理事・監事交代を申請し登記された（4 月 10 日）
- 賛助会員宛に Ecological Research 冊子廃止に伴う会員継続希望調査を郵送及びメールにて行った（4 月 16 日）
- ER 冊子購読個人会員宛に冊子体廃止に伴う返金希望連絡をメールにて行った（4 月 18 日）
- オンラインにて自然保護専門委員会からの要望書「瀬戸内海（上関）における使用済み核燃料中間貯蔵施設の建設計画に関する要望書」の理事への説明および意見交換会を行った（5 月 29 日）
- 学会各賞の応募を開始した（6 月 1 日）
- 生物科学学会連合科学が呼び掛けている「研究費助成事業の全体額増加に関する要望書」に学会として賛同した（6 月 27 日）
- 大学改革支援・学位授与機構へ国立大学教育研究評価委員会専門委員及び機関別認証評価委員会専門委員候補者 4 名を推

薦した(11月28日)

9. 学会賞選考委員会に推薦された生態学会賞・宮地賞・奨励賞(鈴木賞)・自然史研究振興賞候補者が理事会メール審議にて承認された(12月16日)
 10. 理事会にて推薦された功労賞候補者が代議員メール審議によって承認された(1月22日)
 11. 国立研究開発法人海洋研究開発機構と「連携・協力に関する協定書」を締結した(1月31日)
- *他、各種集会への後援名義使用承認4件、賞・助成への学会推薦1件

c. 会計報告(2024年3月~2025年3月)

1. 横浜国立大学へESJ71会場費として1,080,024円を支払った(2月27日)
2. (株)コンベンションプラスへESJ71ポスター会場設置および3/18ライブ配信費用として4,479,618円を支払った(4月5日)
3. 国際文献社へESJ71大会関連委託費として4,437,977円を支払った(4月19日)
4. AGRI SMILへESJ71プラットフォーム利用料およびオンライン運営費用として7,212,243円を支払った(4月27日)
5. 2024年地区会活動費を各地区会に送金した(5月17日)
6. Wiley社へ2024年英文3誌発行費として7,200,000円を支払った(5月23日)
7. Wiley社より2024年英文3誌ロイヤリティとして8,107,650円の入金があった(6月13日)
8. Wiley社より2023年PSBロイヤリティとして500,017円の入金があった(7月9日)
9. 国際文献社へ会員管理委託費4~6月3,087,488円を支払った(7月10日)
10. 令和6年度科研費(研究成果公開促進費)前期分として5,000,000円の入金があった(7月10日)
11. 2023・2024年JaLTER拠出金254,532円を支払った(7月12日)
12. 東京化学同人より「生態学入門第2版」出版印税として138,600円の入金があった(8月23日)
13. イギリス生態学会展示ブース費用として220,998円を支払った(10月23日)
14. 令和6年度科研費(研究成果公開促進費)後期分として3,900,000円の入金があった(10月30日)
15. 土倉事務所へ生態誌74巻1号印刷費およびニュースレターNo.63編集費として1,046,100円を支払った(11月7日)
16. (株)シンクネイチャーより自然史研究振興賞寄附金として20万円の入金があった(12月3日)

17. みずほファクターより2025年会費口座自動引落分として2,940,000円の入金があった(12月12日)
18. Wiley社より2023年PSBロイヤリティとして222,819円の入金があった(12月13日)
19. 東京化学同人より生態学入門2版出版印税として238,280円の入金があった(12月25日)
20. 土倉事務所へ保全生態学研究29-1印刷費として969,600円を支払った(1月6日)
21. 札幌コンベンションセンター会場費として5,330,740円を支払った(1月15日)
22. 国際文献社へ会員管理委託費2024年10-12月分として1,032,715円を支払った(1月17日)
23. 国立京都国際会館へESJ73会場費として5,362,000円を支払った(1月31日)
24. 2024年度の会計監査がWeb会議システム(Zoom)で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2月5日)

2. 大会企画委員会

○大会開催方針概要と前回大会との主要な変更点

- ・ オンサイトを主体としたハイブリッド形式で開催。
- ・ 大会参加費は一般19000円(早期17000円)、学生9500円(早期8500円)。
 - * ESJ71では、一般15000円(早期13000円)、学生7000円(早期6000円)
- ・ オンラインでは、ポスター発表、高校生ポスター発表の閲覧に加えて、授賞式、受賞講演、シンポジウム等のライブ配信や、各種集会のオンデマンド配信が視聴可能。
- ・ 申し込みシステムは国際文献社に依頼し、大会プラットフォームとしては、AGRI SMILE社のONLINE CONFを利用した。
- ・ 従来の5日間の大会日程を4日間(3月15日~18日)に短縮したため、全体的に空き時間が少なくなり、従来とはやや異なる講演配置となった。
- ・ 会場スペースに余裕があるため、ポスター発表は希望者全員がオンサイト発表可能とした。
- ・ 口頭発表については、ONLINECONF経由で事前に発表ファイルを提出、それ以外の集会は会場に発表ファイルを持ち込んで発表を行う形式とした。
- ・ 要旨の提出締め切りを従来通りの2月下旬に戻した。

○大会申込状況（2025年3月6日時点）

回	開催地	有料	無料	合計
63	仙台	1927	469	2396
64	東京	2090	724	2814
65	札幌	1885	421	2306
66	神戸	2003	796	2799
67	名古屋	1608	299	1907
68	岡山	1974	738	2712
69	福岡	1969	743	2712
70	仙台	1759	731	2490
71	横浜	1743	709	2452
72	札幌	1734	323	2057

回	開催地	ポスター	口頭	高校生	シンポ	フォーラム	自由集会
63	仙台	914	251	40	4	13	61
64	東京	955	264	52	14	9	52
65	札幌	899	216	45	19	7	46
66	神戸	918	269	81	21	12	32
67	名古屋	928	295	60	31	7	29
68	岡山	708	224	35	17	11	20
69	福岡	848	235	49	28	9	23
70	仙台	683	241	68	10	10	20
71	横浜	709	227	63	20	9	21
72	札幌	863	326	62	17	10	28

（文責：高橋一男）

3. Ecological Research 刊行協議会

2024年3月8日（土）10:00-11:45に刊行協議会をオンラインで開催し、編集長、副編集長、出版担当理事、編集幹事4名、編集委員11名、ワイリー・パブリッシング・ジャパン2名、編集部5名が出席した。

1. 出版・編集状況

- Vol. 39（2024）として計 87 報、985 ページを出版した。
（※Vol. 38 は計 82 報、852 ページ）
- 2024 年の投稿数は 202 報：過去 10 年間で投稿数が最も少なかった。日本からの投稿数に大きな変化はないが、国外からの投稿数が減少し続けている。
- 受理数は 92 報：採択率は 39.9 % に上昇した。日本からの投稿は高い採択率（> 60 %）が維持されており、受理数も増加傾向にあるが、海外からの投稿は依然として採択率が低い。

一昨年は査読に要する時間が長くなっていたが、2024 年は投稿から First Decision までの日数が 55 日（査読を経た原稿の中央値；前年に比べて -10 日）、受理までの日数が 157 日（中央値；前年に比べて -18 日）と改善した。

- Journal Impact Factor（2023）は 1.7 で、前年から 0.3 ポイント低下した。カテゴリー全体で JIF が低下しており、JIF Rank Percentile（Ecology）は 37.2（Q3）とわずかな低下に留まった。過去 10 年間で見れば、Rank Percentile は上昇傾向にある。
- オープンアクセス（OA）論文は 44 報で、その割合（46.3 %）は上昇傾向にある（2023 年は 39.2 %）。引き続き、会員の皆様には学会による OA 費補助制度を活用していただきたい。

年	2019	2020	2021	2022	2023	2024
投稿数	309	263	267	244	263	202
受理数	92	99	76	76	58	91
受理率	33 %	34 %	30 %	33 %	26 %	38 %
Journal Impact Factor	1.58	1.917	2.056	2.0	1.7	—
JIF Rank Percentile	36.39	32.83	30.35	40.1	37.2	—

2. 編集体制

- 2025 年 1 月より編集幹事として井上智美（国立環境研究所）、石川尚人（海洋研究開発機構）、松崎慎一郎（国立環境研究所）、角田裕志（埼玉県環境科学国際センター）、編集委員として榎木玲美（松山大学）が就任した。また、2024 年 8 月より Copy Editor として尾島ミリアム望美（京都大学）が就任した。

3. Ecological Research Award 2024 受賞論文

- 編集委員および編集幹事の投票により 6 編を選出し、理事会の承認を経て決定した。

4. 投稿規定（Author Guidelines）の改訂

- 投稿規定の見直しを行い、3 月 5 日付けで改訂した。特に Aims and Scope を全面的に見直し、論文の評価基準を科学的に妥当であること、方法論が確かであること、倫理基準が遵守されていること、背景が整理されていてオリジナリティが明確であることとした。また、論文カテゴリー（Article Type）も一部変更された。詳しくはジャーナルのウェブサイトを参照されたい。

5. その他

- X（旧 Twitter）に加え、Bluesky による情報発信を開始した。
- 審査・査読規定の改訂および編集作業ガイドラインの作成を行った。
- 今後の特集として酸性雨をテーマとした企画の掲載が予定されている。特集企画では、関連する論文をまとめて掲載する

ことで認知度の向上が期待されるほか、1 報は日本生態学会の負担により OA となる。特集企画をお考えの方は編集部に
お問い合わせいただきたい。

(文責：富松裕)

4. 日本生態学会誌編集委員会報告

編集委員会（26 名）は 2023-2025 年任期の 3 年目になります。
刊行協議会を札幌大会の会期中に対面で行います。保全生態学
研究とともに、和文誌の発行体制を改めました。

【報告事項】

発行状況：年 2 号（3 月と 9 月）、電子版を科学技術情報発信・
流通総合システム（J-STAGE）で公開し、冊子版 320 部を発行
しています。冊子購読会員は年間 2,000 円、一般販売は 2,500 円
/冊（保全生態学研究と同額）の価格となっています。74 巻の
1 号を 2024 年 6 月に、2 号を 2025 年 2 月に発行しました。

74 巻（2024 年）発行状況

	原 著 論 文	総 説 論 文	学 術 情 報	コ メ ン ト	合 計	頁 数	備考
1 号	1	2	8	3	14	137	特集 2（10 記事）、 連載 1（1 記事）
2 号	0	8	1	2	11	103	特集 2（10 記事）、 連載 1（1 記事）
計	1	10	9	5	25	240	

2020 年 70 巻：264 頁、2021 年 71 巻：131 頁

2022 年 72 巻：214 頁、2023 年 73 巻：78 頁

編集状況（2025 年 1 月 6 日）

記事区分							掲載形式			
受付年	判定	原 著	総 説	情 報	コ メ	合 計	一 般	特 集	連 載	受 賞
2021	却下	6	3	0	0	9	9	0	0	0
	受理	0	5	6	2	13	1	10	2	0
	合計	6	8	6	2	22	10	10	2	0
2022	却下	0	0	1	0	1	0	1	0	0
	受理	0	4	5	1	10	2	6	2	0
	合計	0	4	6	1	11	2	7	2	0
2023	却下	0	0	1	0	1	1	0	0	0
	受理	1	12	11	4	28	3	23	2	0
	合計	1	12	12	4	29	4	23	2	0
2024	審査中	1	1	0	0	2	1	0	0	1
	却下	3	0	0	0	3	3	0	0	0
	受理	2	2	2	0	6	6	0	0	0
	合計	6	3	2	0	11	10	0	0	1

和文誌の発行体制の改革

保全生態学研究とともに、投稿規定を 2025 年 1 月に改定し、
2025 年から国際文献社に発行業務を委託します。和文誌の発
行業務を共通化・効率化するとともに、J-STAGE の早期公開
などを本誌に導入し、迅速に記事を発行します。

(文責：永光輝義)

5. 保全生態学研究編集委員会報告

I. 報告事項

- 発行が遅れていた 29 巻について、1 号が 2024 年 12 月に発
行、2 号も 2025 年 3 月には発行できる見込み。発行が遅れた
ことについてお詫び申し上げます。
- 2025 年発行の 30 巻より、発行業者を土倉事務所から国際文
献社に変更することになった。これは日本生態学会誌も同時
に行っている。これに伴い投稿規定を改定し、保全生態学研
究、日本生態学会誌共通の和文誌執筆要領を作成した。
- 任期途中だが、諸事情により編集委員長を現編集幹事の大澤
剛士に変更することになった。新幹事についても大会中の理
事会において承認される見込み。任期については現状のまま
（～2026 年 12 月 31 日）とする。

II. 刊行状況

● 29 巻 2 号（2024 年 11 月）※3 月下旬に発行予定

原著論文（3 篇）

- 茨田匡・新井隆史・久保昌也・北村亘：小形風力発電近傍の
鳥類の飛翔回数の変化とその要因。
- 江口勇也・佐久間幹大・舩越優実・東典子・寫本樹・片
平浩孝：市町村ができる特定外来生物アライグマの捕獲強化
対策—北海道新十津川町の事例
- 西田貴明・遠香尚史・吉成絵里香・大澤剛士：地方自治体
の規模がグリーンインフラ、生態系を活用した防災・減災の
政策に及ぼす影響。

調査報告（10 篇）

- 山口朝美・大澤剛士：クロヤツシロランの生育可能条件から
みる竹林のハビタットとしての有用性
- 吉田誠・山本大輔・鶴田博嗣：矢作川水系における外来魚チ
ャネルキャットフィッシュの現状：分布情報の確度を考慮し
た生息域の再検討
- 福島路生：音響カメラによる絶滅危惧種イトウ Parahucho
pernyi の個体数モニタリング
- 高槻成紀・片山歩美：宮崎県椎葉村の九州大学宮崎演習林に
おけるシカの食性
- 山本康仁・西田一也：農業用水路の生態系に配慮した各種工
法での改修後におけるトンボ目幼虫の生息状況と水路環境の
推移：東京都多摩市における市民協働によるモニタリング調

査事例

- ・藤井太一・南基泰・長野康之：DNA メタバーコーディング法を用いて同定された火打山におけるニホンライチョウの主要な採食植物
- ・高槻成紀・前迫ゆり：奈良公園の飛火野と春日山原始林内のシカの食性？シカと森林の保全を目指して
- ・村上哲生・南基泰：灌漑用溜池の岸辺に季節的に形成される湿地の地形、水文、及び植生
- ・中村光一朗・安井さち子・上條隆志・吉倉智子・宮野晃寿・繁田真由美：千葉県における洞穴性コウモリ類の生息洞穴の分布と保全のための評価の試み
- ・岩下大輔・小池文人：都市の公園における在来耐陰性植物の欠落と樹冠下の生態系サービスの低下

実践報告 (1 篇)

- ・照井滋晴・深津恵太：釧路湿原周辺の太陽光発電事業地内におけるキタサンショウウオの卵嚢の移転
- 30 巻 1 号 (2025 年 5 月) ※5 月下旬には発行予定

原著論文 (3 篇)

- ・畠本樹・古莊寿奈：神奈川県におけるクリハラリスの年間の?殖状況と繁殖個体の特徴について
- ・永井祥生・大浦泰嗣・大澤剛士：都市緑地における樹木3種の微量元素吸収能力と大気浄化機能
- ・木本祥太・板谷浩男・長船裕紀・守屋年史、上野裕介：日本国内におけるイヌワシの繁殖の継続を支える要因の検討 景観スケールでの評価
- ・高川晋一・角谷拓・石井実・石濱史子・植田睦之・大森威宏・尾崎煙雄・片山直樹・北沢宗大・中村康弘・平井規央・横川昌史：種組成のネスト構造を考慮した指標種による生物多様性評価手法
- ・小倉彰紀・石井潤・片岡剛文・松林順・杉本亮：最大エントロピー法を用いた福井県若狭町におけるナゴヤダルマガエルとトノサマガエルの生息分布予測
- ・南智大・武生雅明：山間地域における景観構造の変化が生物群集の種組成に与える影響

調査報告 (2 篇)

- ・中村柑南・渡壁咲希・高尾実里・川崎優人・松本浩司・畑啓生：ため池における絶滅危惧淡水二枚貝マツカサガイの一時保管法の確立
- ・秦彩夏・佐伯緑・福江佑子・南正人・樋口尚子・村田遼大・原田裕生・高田まゆら：浅間山周辺ニホンジカ集団の齢構成・繁殖および成長特性

実践報告 (1 篇)

- ・松井明・仲野大地・川村正克・野澤重博・竹山正知・佐野弘直：若狭湾沿岸の藻場造成地におけるスポアバッグ設置

保全情報 (1 篇)

- ・米田健："進行する温暖化とシカ被害下でのブナ林の動態－九州森林管理局管内保護林での直近 15 年間のモニタリング資料に基づく解析－"

学術提案 (1 篇)

- ・大澤剛士・山野博哉："結果的"に生物多様性の保全に貢献してきた場所の指標としての行政境界

巻頭言 (1 篇)

- ・大澤剛士：保全生態学研究の新しい体制

III. 編集状況

1. 2025 年 1～2 月 (2025 年 2 月 24 日現在)

	1. 原 著 論 文	2. 総 説	3. 調 査 報 告	4. 実 践 報 告	5. 保 全 情 報	6 学術提案・ 巻頭言	計
新規投稿	8	1	12	1	1	2	25
受理	3	0	6	1	0	2	12
却下・取り下げ・話題不 適 当	4	0	4	0	0	0	8
審査中	1	1	2	0	1	0	5

2. 2024 年 1 月～12 月

	1. 原 著 論 文	2. 総 説	3. 調 査 報 告	4. 実 践 報 告	5. 保 全 情 報	6 学術提案・ 巻頭言	計
新規投稿	1	0	1	0	1	0	3
受理	0	0	0	0	0	0	0
却下・取り下げ・話題不 適 当	0	0	0	0	0	0	0
審査中	1	0	1	0	1	0	3

2023 年新規投稿数 34 編： 受理 25 編, 却下・取り下げ 7 編
2022 年新規投稿数 35 編： 受理 28 編, 却下・取り下げ 7 編
2021 年新規投稿数 35 編： 受理 30 編, 却下・取り下げ 5 編
(文責：大澤剛士)

6. 自然保護専門委員会報告

日時：2025年1月27日 9:00-12:00 リモート会議にて開催

【審議事項】

- 2024年度事業の決算について(126,832円)
- 2025年度事業計画及び予算(アフターケア活動費用等:150,000円)
- 役員の体制について
→久保田康裕委員が九州地区選出委員および専門別委員(熱帯・亜熱帯)の2つを掛け持ちしており負担が大きいことに配慮して、専門委員に専任いただくこととした。
→九州地区選出委員は今後検討。
→要望書・意見書作成・提出の業務負担が大きくなっている現状を踏まえ、幹事2名体制で進めることを提案し、了承された。
- その他;承認手続きに関して
→要望書・意見書の承認手続きについて、回答期限内に委員全員から回答を得ることが難しい状況を踏まえ、その対応について協議→継続審議

【報告事項】

- 自然保護専門委員会の活動報告(2024年度)
→「上関中間貯蔵施設に関わる要望書」を中部電力、上関町、国に提出
- 苦東厚真風力発電事業に関する要望書(案)→総会決議事案
- 作業部会報告・アフターケア委員会報告
- 各地区会報告
- 各担当委員報告
- その他

(文責:関島恒夫)

7. 将来計画専門委員会報告

拡大将来計画委員会(2024.9.6.)

将来計画委員会(2025.3.12)

議題

- 英語口頭発表賞(EPA)について
EPAの廃止あるいは大幅チェンジが必要なのは?→廃止はしない方が良い。
・生態学会の国際化と若手の英語への壁をなくすためにはじめられたもので、現在は、英語の口頭発表のセッションが並行して走れるようになっている。でも、EPAが無くなってしまうと、発表数を保てることはできないだろう。
・ポスター発表賞をとった若手の次の目標になっている。
・英語の上手さではなく、「内容を問うもの」であることを、

よりはっきり明記する(審査委員に対しても)。ネイティブを含めたハイレベルな発表の場にする。

- ・一方で、発表数がおおくなったことで運営に負担。→2にEPAがあるのだから日本語発表賞もあってもよいのでは?
・日本語の方ができる学生もいるのであっても良いと思う。
あった方がよいという意見が殆どである一方で、運営負担がかかる→2に

2. 学会のスリム化

大会と学会組織委員会のスリム化

大会運営(～部会)

- ・大会が複雑すぎる。自由集会・シンポジウム・口頭・ポスター・高校生等。
一方で若手が自由集会を企画しやすい。
・ポスター賞など、少人数(一人も)で担当する方がやりやすい場合もある。主担当者を一人きめて、その人が数年継続し次に引き継ぐ方が、単年度で変わるよりスムーズでは。
・企画運営テンプレートと作り、毎年それを引き継ぐと楽ではないか。
・大会のクオリティー(複雑性)と時間とお金がトレードオフ。
どういった軸でトレードオフがあるのかを確認しては。

組織委員会

- ・細分化していて重複が多いので、情報を共有しながらスリム化を検討していく。
・委員会が多く、どの委員会がどの権限をもっているのかわからない。整理が必要。将来計画委員はこれを提案する立場にあるのでは。

3. 日本生態学会の世界的なプレゼンス向上のために

海外から日本へ

- ・HPの充実(国際学会仕様)。
・東アジアの学会として周辺の国・地域との連携強化。

日本から海外へ

- ・学生(若い研究者)の海外派遣。これからを担う若手に海外研究者とコネクションをつくる機会を設ける。
・既存のプログラムなどに応募することを支援する(森林実習や臨海実習など、生態学に直接関連するプログラムに参加すること(+αの研究室訪問))。

4. その他

ERシンポについて

- ・中堅・若手を招聘し、シンポ後に交流を促す企画を設ける。
・海外の大物に未来のある日本の若手を挑ませる。海外の新進気鋭の若手を送り込んでもらって日本の大御所にアタックさせる。というようなERシンポを企画する。

報告事項

1. 京都大学生態学研究センター報告(中野)

- ・次年度よりセンター長交代・また任期は最大4年と規定
- ・研究調査船「はす」の更新・新船建造を申請。令和6年度の補正予算で採択。
- ・共同利用 共同研究拠点

これまではAだったが、今回の中間評価ではA-に
(宇野) 共同研究拠点評価をどのように改善するか方策はあるか
→中国、アメリカとの共同研究や、工藤先生のプロジェクト、安定同位体分析などの他システムへの適用などを報告書に取り入れる。

(宇野) 外部利用を増やす、生態学における生態研のプレゼンスを生態学会を通して大きくすると言った方策は取れないか
(石川) 生態学会でシンポを行うなども有効ではないか

2. 総合地球環境学研究所活動報告 (石井)

- ・現在は運営委員会に生態学会員はいない
- ・生態学に関連するプロジェクトは3件進行中：以前にくらべて生態学会員が参画するプロジェクトが少ない。
- ・次年度と次次年度は通常サイズのプロジェクト新規募集は予定なし。その間でも安定同位体比プロジェクト共同利用申し込みあり

(文責：塩尻かおり)

8. 生態学教育専門委員会報告

総会に報告すべき事項

1) 委員の退任

長年、当委員会で活躍されてきた嶋田正和氏と西脇亜也氏が委員を退任する。

2) 一般教養・初学者向けの教科書「未来を生きるすべての人の教養の生態学」の出版が2025年3月25日(書店販売日4月4日)に決定した。

3) 2025年度の計画

1. 生態学会大会でのフォーラムの企画・開催
2. 日本生態学会誌での連載「生態教育の今と未来」の継続
3. SSH 生徒研究発表会での生態学会の広報活動を行う。

(文責：丑丸敦史)

9. 生態系管理専門委員会報告

2024年度活動報告

継続的な会議を重ね、近年のネイチャーポジティブの動きに応じた新たな活動の開始。

○調査・提言部会

- ・前年度のグリーンインフラ・NbSの公開シンポジウムの議論を踏まえて、「グリーンインフラに関する学会間会合」を開催(2025/3/6@東大農ハイブリッド)。複数の学会(土木学

会、環境経済・政策学会、応用生態工学会、都市計画学会等)と実装に向けた課題認識を共有し、連携機会を検討。

(2025/3/16_U09_グリーンインフラ・ネイチャーポジティブ)

- ・ネイチャーポジティブに関する情報整理に向け、「自然の状態(State of Nature)を測る共通指標案に関するセミナー」(2025/3/4 オンライン)を共催し、ネイチャーポジティブに関する学会内の議論を開始(IUCN 日本委員会等と共催)。

○キャンパシティビルディング部会

- ・自然共生サイトに関連する動きを捉え、生態学会の先行事例の学びの機会を構築し、生態学の貢献や関わりを議論開始。

(U02_自然共生サイト・生態学者)

2025年度活動計画

①土木学会等の他学会連携による NbS・GI の推進、②自然共生サイト等への貢献。

- ・共催シンポジウムの開催等、学会間連携による NbS・GI の社会実装の推進を図るとともに、自然共生サイト等の生態学者の役割、活動等の情報共有を進める。

(文責：西田貴明)

10. 大規模長期生態学専門委員会報告

2025年3月13日9:00-10:00 オンライン開催

参加者：大手、村岡、石原、伊東、内海、黒川、中野、中村
国内のネットワーク

(1) 日本長期生態学研究ネットワーク (JaLTER)

- ・JaLTER データベースを DIAS (データ統合・分析システム)に移行した。
- ・DIAS と JaLTER の連携による生態系研究の発展、社会の環境課題への対応に貢献する方向性に関する検討を開始。
(DIAS 事業計画として、京都大学と岐阜大学が受託)
- ・日本生態学会理事会では JaLTER データベースと Ecological Research の Data Article 出版の関係性について議論された。主な論点はメタデータ・データ登録作業と出版のスケジュールに関するものだが、データ登録先としてのリポジトリの選択肢が増えている中で JaLTER データベースへの登録を推奨することの意味に関する意見も出ており、生態学コミュニティの発展を支援する観点での議論が必要である(村岡所感)。
- ・DIAS と JaLTER の連携に関するフォーラムを第72回日本生態学会大会において開催する(情報交流支援専門委員会と共同開催)。
- ・JaLTER Open Science Meeting 2024 を岐阜県高山市で開催した(2024年8月1-2日)。「高山サイト30周年記念ワークショップ」および「デジタルバイオスフェア・キャンパー

ン」との共催であり、7月29日―8月2日の参加者は約75名。観測キャンペーンの様子は中京テレビの番組「アプデの森」で紹介された。

- ・2025年春からの共同代表選が行われ、仲間雅裕さんと村岡裕由さんが再選された。

(2) スターダストプロジェクト

- ・JAXAを中心として大学演習林や森林総研などが協力し地上観測と衛星観測をつなげて、森林バイオマスの推定を進めている

(3) 森羅データベース

- ・大学演習林の毎木データの公開 Ecol. Res.のデータベースとして投稿予定。

(4) ライダー・ネットワーク

- ・国内（モニ1000）からも中国からも長期モニタリングサイトで実施された研究が含まれる。京大の小野田さんのグループがライダーのデータでData Paperが出版

海外のネットワーク

(1) アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク (APBON)

- ・ウェビナーを開催（第20回=2024年1月、第21回=7月、第22回=10月、第23回=12月）。
- ・第15回ワークショップを開催（2024年2月、東京）
- ・第16回ワークショップを開催（2025年2月、フィリピン）
- ・APBON Highlights 2023等の活動報告パンフレットを発行（<http://www.esabi.biodic.go.jp/apbon/aboutus/publication.html>）
- ・第16回アジア・オセアニア GEO シンポジウムで分科会を開催（2024年9月、東京）

(2) US-Japan Joint Seminar on Catchment Hydrology and Biogeochemistry

- ・集水域の水文学と生物地球化学に関する日米合同セミナー

(3) DIWPA の国際生物学コース (DIWPA International Field Biology Course)

- ・2024年12月9日～15日、小笠原（父島）で開催した。当該コースには、国際公募により審査・選出されたインドとフィリピン、および弊センターの客員准教授であるタイの Ananya Popradit 博士も参加した。

(4) GEO-TREES (ground-based tree-by-tree measurement initiatives)

- ・GEOのSub Working Groupとして2023年に設立
- ・既存の熱帯林調査区ネットワーク（ForestPlots.net、[ForestGEO](https://ForestGEO.org)、[TmFO](https://TmFO.org)）の毎木データとLiDARデータを組み合わせて、世界の森林バイオマス推定のリファレンスデータを蓄積、公開する

- ・Direction: Jérôme Chave (CNRS, France), Klaus Scipal (European Space Agency, Italy)

- ・Network representative: Stuart Davies (Smithsonian Institution, USA), Oliver Phillips (University of Leeds, UK), Camille Piponiot (CIRAD, France)

- ・経費：GEO-TREESの経費として、スミソニアン熱帯研究所は、[アマゾン CEO の財団 \(Bezos Earth Fund\)](https://www.bezos.com/earth-fund/) と [Gordon and Betty Moore 財団](https://www.gordonandbetty.com/) からそれぞれ1,200万ドル（約18億円）ずつの支援を受けている

(5) Herbivory Variability Network

- ・第二期(Phase 2)のデータ収集が行われている

(6) 植物種多様性が多栄養段階相互作用に与える影響のネットワーク

- ・植物種多様性が多栄養段階相互作用に与える影響に関する全球スケールでの共同研究が進められている

(7) LIFEPLAN

- ・国際的生物多様性プロジェクト（2020～2025、European Research Council (ERC)）。バイオインフォマティクス、AI、環境DNAだけでなく、データ収集共有なども新しい方法が採用されている。まもなくsoundscapeについての全球レベルの解析が公表予定。

その他プロジェクト

(1) 科学技術・学術審議会 第10期地球観測推進部会

- ・「今後10年の我が国の地球観測の実施方針」を纏めるべく会議を隔月で開催（於・文部科学省、村岡が部会長）。2025年2月に同方針を策定・公開した。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/111/1422531_00002.htm

- ・今回の「実施方針」では、生物多様性・生態系分野に関する観測・データ共有・利活用の必要性に関する議論がこれまで以上に拡大した。2024年7月には生物多様性分野に関する国内関係機関・関係省・民間企業のヒアリングを実施した。資料は公開されている。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/111/1421375_00005.htm

(2) EAFES

- ・森林生態系機能に関するシンポジウム企画

（文責：中村誠宏）

11. 野外安全管理専門委員会報告

日時：2025年2月28日～3月12日 メールにて実施

参加者：飯島、奥田、鈴木、粕谷、北村、中島、石原

●2024年度活動報告

- ・野外調査時の事故についての情報を収集した。

仁淀川河川調査中にウェーダー着用による溺水事故で山口の学生1名が死亡（詳細不明）

1997年から現在までにおいて、委員会として把握している死亡事故は11件（内訳、教員6名（行方不明1名含む）、学生7名、研究員1名）、後遺症が残る受傷事故が2件。

- ・72回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。

野外調査に初めて行く人のための安全講習

みんなで作ろう！誰もが参加しやすいフィールド調査マニュアル（キャリア支援専門委員会主催）

- ・安全管理マニュアルの改訂と出版に向けての作業を進めた。出版決定！

「フィールド調査のための安全管理マニュアル」日本生態学会（監修）

朝倉書店

定価2,750円（本体2,500円＋税）

B6／184ページ

発売予定日：2025年03月21日

ISBN：978-4-254-18070-1 C3040

https://www.asakura.co.jp/detail.php?book_code=18070&srsid=AfmBOohSKBTk2otvFF7TKZS62makN4vVse3XnVViOafleFpWUjDVwVl

●2025年度活動予定

- ・73回大会でのフォーラムの準備を行う。

- ・フォーラム内容の動画配信を進める。

- ・事故情報の収集と集約

野外調査・実習中の事故やヒヤリハット事象の例を引き続き収集し、解析を続ける。

該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。

- ・安全管理マニュアルの改訂

最新の情報と技術、および多様性を考慮した内容へのアップデートを引き続き行う。

（文責：石原道博）

12. キャリア支援専門委員会報告

○総会に報告すべき事項

【2024年度活動報告】

1. 札幌大会での企画

- ・フォーラム「みんなで作ろう！誰もが参加しやすいフィールド調査マニュアル」

U03：（3月16日12:15-13:45, Room F）

- ・育児支援（会場内への託児室とファミリー休憩室の設置、託児利用補助）の運営サポート

- ・こども生態学講座の開催支援

- ・継続教育 CPD 認定プログラムの登録（シンポ2件、フォーラム1件、自由集会2件）と受講証明書の発行

- ・キャリアカウンセラーによる相談ブース（オンライン個別相談）

- ・企業等の就職関連情報（大会HPへのリンク掲載）

2. その他

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年3回）

男女共同参画学協会シンポジウムへの参加・報告書作成

- ・女子中高生夏の学校でポスターを掲示、キャリア相談会へ参加、講師による実習を実施、学会ニュースレターに報告

- ・大会参加者属性アンケート解析

- ・委員会HPの更新

【来年度の活動計画】

1. 京都大会での活動

- ・キャリア支援・男女共同参画フォーラム

- ・育児支援（会場内への託児室とファミリー休憩室の設置、託児利用補助）の運営サポート

- ・キャリア支援相談室（個別面談、イベント）

- ・企業等の就職関連情報（大会HPへのリンク掲載）

- ・CPD 認定プログラムの登録と受講証明書の発行

2. その他の活動

- ・ダイバーシティ推進宣言に対応する取り組みの強化

「ダイバーシティを考慮したフィールド調査マニュアル（仮）」の作成

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年4回程度）

- ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年1回）

- ・女子中高生夏の学校への参加

- ・大会参加者属性アンケート解析

（文責：上野裕介）

13. 情報交流支援専門委員会報告

委員長：村岡裕由

委員：大澤剛士、長谷川功、森田健太郎、深谷肇一、津田吉晃
Jeconetの運営状況について

会員数：3963人（2025年2月25日現在）

配信数：3749件（ 〃 ）

委員会体制について

当委員会では、長年 Jeconet の管理運営に尽力してきた長谷川功氏、森田健太郎氏、ならびに前情報担当理事の大澤剛士氏が情報交流支援専門委員会の立ち上げ期から4年間にわたって委員として活動してくれた。各氏の生態学会および生態学コミュニティへの貢献は大変大きい。

当委員会では3氏の任期を終了することとして、次期より

新委員を迎えて Jeconet 管理運営にあたる。

(文責：村岡裕由)

14. 監査報告

一般社団法人日本生態学会監事 大塚俊之・黒川絃子
当法人の 2024 年度の事業報告、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2024 年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。また、事前に資料を電子媒体で受領した上で、2025 年 2 月 5 日に学会事務局と Web 会議システムで接続し、関係する会計書類を逐次閲覧した。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

15. 英文誌出版状況報告

英文誌 3 誌出版体制

2024 年 1 月より、日本生態学会は Ecological Research (ER 誌) に加えて、Population Ecology (PE 誌)、Plant Species Biology (PSB 誌) の出版元となった。

PSB を対象とした 2024 年度研究成果公開促進費（国際情報発信強化）オープンアクセス刊行支援について採択された。それに伴い「Plant Species Biology Gold-OA 誌化に関わる活動方針」を策定し、6 月 15 日に対面の PSB 編集委員会会議を実施、生態学会としての PSB 誌 Gold-OA 誌化に向けた方針を説明し、編集委員と協議した。

今後の 3 誌の運営については、ESJ72 において 3 月 18 日に開催予定のフォーラム U18「Plant Species Biology 誌は OA 誌化して何処へ向かうのか？」で、三宅 崇 (Plant Species Biology 誌編集長)、John MORRIS (Wiley APAC) を交えて説明会を行う。

PE 誌は、山内淳前編集長から横溝裕行編集長に交替した。

OA 出版補助制度

2023 年 4 月から、会員の ER 誌、PE 誌での OA 論文出版費用を補助し、自己負担額 18 万円で出版できる制度を開始している (<https://www.esj.ne.jp/er/authors.html#OASubsidy>)。

2024 年 4 月から、会員の PSB 誌での OA 論文出版費用を補助し、自己負担額 12 万円で出版できる制度を開始した (<https://esj.ne.jp/psb/openaccess.html#OASubsidy>)。

学会からの OA 費補助は、責任著者の所属機関と Wiley 社が OA 出版契約している場合には原則として適用外となる（システム上、機関契約が優先される）。国内主要大学で Wiley 社との転換契約が進み、学会からの OA 費補助の数は想定内に収まっている。また、地区会や他学会が、自己負担額分を負担し、OA 費の著者負担を無くす仕組みも導入されつつある。ER 誌では 2024 年に出版論文 87 報中 38 報の OA 論文出版があった（2023 年は 16 報）。

PSB の Gold-OA 誌化に向けた Wiley 社との契約交渉

2025 年 1 月 29 日に Wiley 社より PSB 誌のオープンアクセス転換に伴う APC の設定および 2026-28 年の出版費用についての提案があった。概要として、通常論文の APC は USD1,650、Notes and Insights は USD990 となり、現状の OA 出版価格である USD2,750 よりも大幅に安くなる。本提案によって PSB の科研計画を効果的に推進することが可能になると判断している。6 月末日までに 3 誌の出版契約が更新され締結する予定。学会からの英文誌出版支出総額は低減する見込み。

海外出展報告

ESA 2024（8 月 4-9 日、ロングビーチ、USA）に、日本生態学会が代表する形で、英文誌 3 誌の宣伝ブースを出展した（北島会長が現地対応）。英文誌冊子体サンプルの展示、宣伝パンフレットやクリアファイルなどのノベルティグッズの配布、各国生態学会のリーダーとの会議などに参加した。X で現地状況を広報。

BES 2024（12 月 10-13 日、リバプール、GB）に、日本生態学会が代表する形で、英文誌 3 誌の宣伝ブースを出展した（今井伸夫 ER 編集委員、横溝裕行 ER 編集委員・PE 次期編集長、西澤啓太会員が現地対応）。X で現地状況を広報。

X から BlueSky への移行について

Twitter から X への変更後に顕在化している各国学会の X からの撤退を鑑み、10 月に BlueSky アカウントを設置し、現在 3 誌のアカウントを運営している。

その他

12 月に JALTERDB のホストサーバー移動（環境研→DIAS）は完了し、ER の Data Article の出版が再開された (<https://jalter.diasjp.net/meta/data>)。

(文責：出版担当理事 久米篤)

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員（任期：2023.3 総会后～2025.3 総会まで）

理事：立田晴記（専務理事）、赤坂宗光（庶務担当）、
辻かおる（会計担当）

監事：大塚俊之

- ・理事会推薦役員候補者（任期 2025.3 総会后～2027.3 総会まで）

理事：内海俊介、半場祐子、山尾僚

監事：立田晴記

第2号議案 2024年度決算承認に関する件

当期（自2024年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	24 予算	24 決算	費 目	24 予算	24 決算
年会費			会誌発行費		
┌ 正会員（一般）	25,000,000	25,466,300	┌ ER・PE・PSB	700,000	7,218,437
└ 正会員（学生）	4,800,000	4,923,000	生態誌	2,000,000	915,200
└ 賛助会員	600,000	950,000	保全誌	4,000,000	916,600
小計	30,400,000	31,339,300	会誌発送費用	200,000	146,754
			ニュースレター	300,000	204,050
科研費（OA 支援）	0	8,900,000	英文誌 Open Access 経費	7,000,000	9,965,962
学会誌売上げ	500,000	493,500	英文誌編集費	600,000	529,895
出版印税	700,000	759,292	└ 和文誌編集費	600,000	531,385
論文掲載料	800,000	1,984,100	小計	15,400,000	20,428,283
広告代	20,000	10,000			
著作権使用料	500,000	151,389	会議費	300,000	258,428
大会収入	17,430,000	19,041,000	旅費・交通費	1,000,000	1,161,705
講習会費	0	0	人件費	17,000,000	19,622,949
寄附金	500,000	500,000	地区会活動費	2,084,855	2,189,396
その他	2,000	8,836,593	大会支出	21,470,000	21,590,647
前年度繰越金	99,160,638	99,160,638	個体群生態学会出版企画費	350,000	350,000
			INTECOL 会費	300,000	0
			事務費		
			┌ 通信費	200,000	204,956
			消耗品費	400,000	188,389
			雑費	300,000	281,036
			決済代行手数料	1,000,000	1,014,102
			サーバ関連費	300,000	298,075
			└ 事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	3,880,000	3,666,558
			各種委員会費	1,000,000	1,061,946
			広報費	1,000,000	1,114,710
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	0	0
			講習会費	400,000	43,300
			会員管理委託費	4,600,000	4,650,730
			法人税	300,000	201,700
			次年度繰越金	80,927,783	94,835,460
合計	150,012,638	171,175,812	合計	150,012,638	171,175,812
単年度収入	50,852,000	72,015,174	単年度支出	69,084,855	76,340,352
			単年度収入-支出	-18,232,855	-4,325,178

<特別会計>

学会賞準備金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	24 予算	24 決算		24 予算	24 決算
前年度繰越金	9,324,317	9,324,317	賞金		
寄附金（自然史研究振興賞）	—	400,000	宮地賞	300,000	300,000
預金利息	0	617	大島賞	0	0
			鈴木賞	150,000	150,000
			自然史研究振興賞		200,000
			小計	450,000	650,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	8,874,317	9,074,934
合計	9,324,317	9,724,934	合計	9,324,317	9,724,934

<貸借対照表>

2024 年 12 月 31 日現在

科 目	金 額	科 目	金 額
（ 資 産 の 部 ）	円	（ 負 債 の 部 ）	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現金及び預金	135,257,680	未払金	2,534,407
前払費用	914,223	未払法人税等	201,700
未収収益	241,000	前受金	33,086,000
		預り金	600,936
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	9,074,934	退職給付引当金	5,154,400
		負 債 合 計	41,577,443
		（ 正味財産の部 ）	
		一般正味財産	94,835,460
		指定正味財産（うち特定資産への充当額）	9,074,934
		正 味 財 産 合 計	103,910,394
資 産 合 計	145,487,837	負債・純資産合計	145,487,837

第3号議案 2025年度予算承認に関する件

次期（自2025年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	24 決算	25 予算	費 目	24 決算	25 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,466,300	25,000,000	ER・PE・PSB	7,218,437	7,200,000
正会員（学生）	4,923,000	4,800,000	生態誌	915,200	3,000,000
賛助会員	950,000	600,000	保全誌	916,600	4,000,000
小計	31,339,300	30,400,000	会誌発送費用	146,754	200,000
			ニュースレター	204,050	0
科研費（OA 支援）	8,900,000	10,900,000	英文誌 Open Access 経費	9,965,962	10,000,000
学会誌（和文誌）売上げ	493,500	500,000	英文誌編集費	529,895	1,000,000
英文誌ロイヤルティ	—	8,800,000	和文誌編集費	531,385	600,000
出版印税	759,292	700,000	小計	20,428,283	26,000,000
論文掲載料	1,984,100	1,000,000			
広告代	10,000	0	会議費	258,428	300,000
著作権使用料	151,389	150,000	旅費・交通費	1,161,705	1,300,000
大会収入	19,041,000	24,000,000	人件費	19,622,949	21,000,000
寄附金	500,000	0	地区会活動費	2,189,396	2,186,355
その他	8,836,593	6,000	大会支出	21,590,647	25,000,000
前年度繰越金	99,160,638	94,835,460	個体群生態学会出版企画費	350,000	350,000
			INTECOL 会費	0	300,000
			事務費		
			通信費	204,956	200,000
			消耗品費	188,389	400,000
			雑費	281,036	300,000
			決済代行手数料	1,014,102	1,100,000
			サーバ関連費	298,075	700,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	3,666,558	4,380,000
			各種委員会費	1,061,946	1,000,000
			広報費	1,114,710	1,300,000
			選挙費	0	250,000
			EAFES 費用	0	200,000
			講習会費	43,300	200,000
			会員管理委託費	4,650,730	4,700,000
			法人税	201,700	300,000
			次年度繰越金	94,835,460	82,525,105
合計	171,175,812	171,291,460	合計	171,175,812	171,291,460
単年度収入	72,015,174	76,456,000	単年度支出	76,340,352	88,766,355
			単年度収入-支出	-4,325,178	-12,310,355

<特別会計>

学会賞準備金

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	24 決算	25 予算	費 目	24 決算	25 予算
前年度繰越金	9,324,317	9,074,934	賞金		
寄附金（自然史研究振興賞）	400,000	200,000	宮地賞	300,000	300,000
預金利息	617	0	大島賞	0	0
			鈴木賞	150,000	150,000
			自然史研究振興賞	200,000	200,000
			小計	650,000	650,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	9,074,934	8,624,934
合計	9,724,934	9,274,934	合計	9,724,934	9,274,934

第4号議案 第75回大会(2028年)担当地区会に関する件

第75回大会（2028年）担当地区会候補中国四国地区について提案があり満場異議なく承認可決した。

第5号議案 要望書に関する件

「（仮称）苫東厚真風力発電事業計画の評価再調査・事業変更を求める要望書」提出について提案があり、承認を求めたところ満場異議なく承認可決した。

（仮称）苫東厚真風力発電事業計画の評価再調査・事業変更を求める要望書

一般社団法人日本生態学会会長 北島 薫
一般社団法人日本鳥学会会長 綿貫 豊

（仮称）苫東厚真風力発電事業計画地には自然度の高い湿原、草原、湖沼等がまぎって存在し、多数の希少動植物が生息・生育しており、風力発電所の建設と運用による環境変化が当該地域の生態系や生物多様性に多大な影響を及ぼすことが予測されている。そのため、2020年には環境影響評価配慮書に対し日本生態学会北海道地区会から「苫東厚真風力発電事業計画段階環境配慮書に対する意見書」を、2022年には環境影響評価方法書に対し日本生態学会から「苫東厚真風力発電事業計画の事業区域の変更を求める要望書」を事業者他に提出した。また、日本鳥学会から「（仮称）苫東厚真風力発電事業に関する意見書」を、2021年には日本鳥学会から「（仮称）苫東厚真風力発電事業に対する事業中止要望書」を事業者他に提出した。しかしながら、当事業では、これらの意見は全く反映されず、現在、環境影響評価準備書（以下、準備書）の審査が進められている。特に、準備書では、再三の要望にもかかわらず、当事業による環境変化が生態系や生物多様性に与える影響を予測するために

必要な調査が多く項目で実施されておらず、また、実施された項目であってもその質・量に乏しいことから、科学的判断を示すことが困難な状況である。したがって、本事業の影響に関する再調査を実施し、その結果が明らかとなるまでは本地域における事業を停止すること、再調査の結果をもとに計画を見直すこと、環境影響の回避・低減が不可能である場合には事業地を変更することを改めて要望する。

1) 事業地の生態学的重要性

事業地には自然度の高い湿原、草原、湖沼等が存在し、これらが景観単位として機能しており、特に以下の点で重要である。

- ・事業地面積は、環境省「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」に選定された安平川湿原に匹敵する460haに達する（文献¹²をもとに計算）。
- ・事業地は、大部分が海浜を含めた湿原・草原で占められている。事業地に含まれる浜厚真海岸は、「北海道自然環境保全指針」において「身近な自然地域」に選定されており³、各種公共事業や開発等の計画や実施の際に、適切に保全への配慮を行うことが求められている。
- ・事業地は、ラムサール条約登録湿地であるウトナイ湖に隣接するとともに、日本野鳥の会・バードライフインターナショナルによる重要野鳥生息地（IBA）およびコンサベーションインターナショナルによる生物多様性の保全の鍵になる重要な地域（KBA）に囲まれており、これらと一体となることで動植物の重要な生息生育地となっている。
- ・事業地は勇払原野の中でも有数の希少種・絶滅危惧種の生息生育地であり、鳥類では文化財保護法指定種（天然記念物・特別天然記念物）に5種、国内希少野生動植物種指定種に9種、環境省レッドリスト（環RL）に41種、北海道レッドリスト（道RL）に46種が確認されている⁴⁷。魚類

では環 RL および道 RL にそれぞれ 3 種^{5,7,8}、節足動物では環 RL に 18 種、道 RL に 7 種が^{6,7,9}、維管束植物では環 RL に 9 種、道 RL に 5 種が確認されている^{6,7,10}。

- ・ 鳥類では、チュウヒ（環 RL 絶滅危惧 IB 類・国内希少野生動植物種）、オジロワシ（環 RL 絶滅危惧 II 類・国内希少野生動植物種）、およびタンチョウ（環 RL 絶滅危惧 II 類・国内希少野生動植物種・特別天然記念物）の重要な生息・繁殖地である^{1,5,11,12}。特に、チュウヒに関しては、事業地はサロベツ原野に次ぐ国内 2 番目の繁殖地となっている。
- ・ 植物では、ナガバエビモ（環 RL 絶滅危惧 IA 類・国内希少野生動植物種）をはじめとする海浜や池塘等の特殊な生育地に現れる水草の絶滅危惧種が確認されており^{6,7,10}、事業地内は、各地でほぼ消失した海浜草原・湿原が自然状態に近い状態で現存する希少地域である。

2) 準備書における環境影響評価の問題点

事業地は希少動植物の重要な生息・生育地であるが、準備書ではこれらの生息・生育地の内部または近接するエリアの自然度の高い植生帯に風車を建設する計画となっており(図 1)、事業者の環境影響評価は、調査解析方法に問題があることで科学的根拠が希薄な推測に基づくものとなっている。したがって、生態系・希少動植物への事業の影響を回避または低減可能と結論することは不可能である。以下に、これらの指摘内容を具体的に述べる。

- ・ [準備書全体] 現地調査データの質・量および解析の信頼性が乏しく、科学的な解釈に問題点が多い。チュウヒやアカモズでは営巣地の見落としが複数あり（アフターケア委員会の調査に基づく）、バードストライクの確率が高いチュウヒの幼鳥のデータを取得できていない。渡り鳥・ガン類の衝突確率の推定では、不適切なデータの使用が見られる(参考資料 1：北海道新聞 2024 年 10 月 16 日第 3 社会面)。さらに、専門家複数名の意見を準備書に掲載しないといった、環境影響評価として不適切な手続きが行われている（道環境影響評価審議会準備書 2 次質問で指摘・事業者認知）。上記のことより、再調査の必要性が各所に認められる。
- ・ [チュウヒ] 事業地およびその周辺にチュウヒの営巣地が複数箇所存在しているにもかかわらず、「風力発電事業におけるクマタカ・チュウヒに関する環境影響評価の基本的考え方」（以下、「基本的考え方」）¹³や「チュウヒ保護の進め方」¹⁴、専門家の意見および論文等の知見を参考とせず、風車配置が検討されている。事業者は、「基本的考え方」において、既存風車の近くに営巣したチュウヒの巣とその風車との最短距離を基にそれより遠ければ影響が小さいと

しているが、「基本的考え方」では、そのことで影響が低減・回避されるということは記述されていない。既に存在するチュウヒ営巣地の近くに風車を建設した際の影響を、風車が既にある状態で営巣したチュウヒと風車の離隔距離と同じと仮定して予測することは、科学的に不適切な分析方法である。これは「基本的考え方」にある「営巣地と連続する草地や営巣中心域、隣接ベアの干渉行動が生じる場所に風車を建設すべきではない」という指針とは相容れない。もっとも重要な点の一つとして、計画された風車位置は全てチュウヒの主要行動圏内にあり、さらに本事業地では、これまでに風車からの離隔距離が 150 m の所に 1 巣、180 m の所に 1 巣が確認されているものの、事業者の調査では見落とされている（アフターケア委員会調査に基づく）。また、これらの離隔距離は、「基本的考え方」における 150-200 m の範囲にあり、巣への影響を避けるには、さらなる離隔距離が必要である。加えて、離隔距離は 1.2 km でも不十分という研究もある¹⁵。以上のように、複数の風車がチュウヒの巣との離隔が不十分であり、現行の配置計画では、風車建設の影響は低減もしくは回避できないと判断せざるをえない。チュウヒに限らず、バードストライクは離隔距離が十分でない場合に、飛躍的に危険性が増す。さらに、チュウヒは準備書に掲載された専門家の試算において、事業にともなう生息地改変によりつがい数や巣立ち雛数が無視できない程度に減少すると予測されているが、これに対する保全措置は準備書には記載されていない。

- ・ [タンチョウ] 風車との離隔が約 400 m といった、離隔距離が必ずしも十分とはいえないタンチョウ営巣地が事業地内で確認されている。これまで、風力発電事業地内でタンチョウの営巣事例は報告されておらず、タンチョウに対する風車建設の影響評価は慎重に行う必要がある。加えて、現在、北海道に生息するタンチョウは個体数を回復させつつある状況にあり、事業地内の営巣地および周辺は将来的に分布拡大の拠点地域となる可能性が高いため、風車の建設を控えるべきである。
- ・ [バードストライク] バードストライクの予測値は、いずれの種においても押しなべて高い。年間予測衝突数が、令和 3 年のオジロワシにおいて 0.139（環境省モデル）と 0.319（由井モデル）、令和 3 年のガン類で 1.775（環境省モデル）と 4.702（由井モデル）となっており、道内の他事業でこれまで問題となった高い推定値と比較しても突出して高いが、これに対する保全措置が準備書に記載されていない。加えて、各種の飛翔高度の測定は正確さを欠いており、影響予測値は低く推定されている。年度により渡り鳥の調査時期および調査期間が異なり、令和 3 年の予測値が

最も精度が高い一方、令和4年と令和5年の予測値は猛禽類調査等に付随して得られた定量性のないデータに基づいて算出されている。夜間の渡り鳥の衝突確率の評価は、データが全く取得できておらず、不十分である。例えば、ガン類の高い予測衝突数に対して、夜の渡りに対しライトを点灯させることで回避を促すとしているが、その効果はこれまで証明されていない¹⁶。

- ・ [植生] 本海浜区域の植生と景観の特徴は、日本に残された数少ない海浜性の植生ゾーネーションが残っていることにある。しかし、本計画では、海浜の一植生帯に風車が建設され、特定の植生帯が大きく消失することになる。本計画書の風車配置では、特定の植生帯が大きく減少するため、独特の植生ゾーネーションをなす海浜景観の保全は不可能であり、事業と景観保全の両立を図ることはできない。加えて、自然植生度10の海浜植生を大規模に改変することとなるが、これらへの影響および評価についても科学的根拠に基づき言及はない。
- ・ [植物] 重要な植物種としてリスト（表 3.1-44）されたもののうち、建設計画地を含む海岸植生帯において、キタノコギリソウ（ホロマンノコギリソウ）やシコタンキンボウゲの定着がアフターケア委員会の調査により確認されている（北海道大学総合博物館陸上植物標本庫（SAPS））。なお、近接する湿地においても複数の重要種が確認され、浜厚真海岸からモウコムカシヨモギが50年ぶりに再記録された¹⁷。準備書においては、上記植物種の記載がないことを始めとして、植物相の把握が不十分である。さらに、重要な植物種の生育場所が複数見落とされており、これらに対する影響が評価されていない。植生についても、準備書では、未調査の植生が複数認められ、データの信頼性は極めて低い。少なくとも、海岸線に沿った区域に連続した風車の配置は避けるべきであり、再調査と再解析を行った上で、配置の見直しが必要である。

以上のように、当事業に対する環境影響評価は科学的信頼性を著しく欠き、事業実施による環境変化が生態系や生物多様性に与える影響を回避・低減できる科学的根拠は全く示されていない。むしろ、当事業が実施されれば、事業地内外の生態系に大きな影響が及び、その結果生物多様性が低下することが十分に予見される。このような場合には、風力発電事業と環境保全の両立は困難であり、計画は見送られるべきである。

日本生態学会と日本鳥学会は、科学的評価を行うには現行の環境影響評価準備書では不十分であると判断し、再調査の実施を強く要望する。さらに、再調査期間中の工事停止を求め、再調査の結果、環境影響の回避・低減が不可避と判断される場合

には、事業地の変更を求める。これらの措置が取られない限り、当該風力発電事業が生態系に重大な影響をもたらす危険があることを強く懸念する。

引用文献

1. Senzaki, M., & Yamaura, Y. (2016) Surrogate species versus landscape metric: does presence of a raptor species explain diversity of multiple taxa more than patch area? *Wetlands ecology and management*, 24, 427-441.
2. Kitazawa, M., Yamaura, Y., Senzaki, M., Kawamura, K., Hanioka, M., & Nakamura, F. (2019) An evaluation of five agricultural habitat types for openland birds: abandoned farmland can have comparative values to undisturbed wetland. *Ornithological Science* 18, 3-16
3. 北海道環境生活部環境局自然環境課. 北海道自然環境保全指針. (2025-1-08 参照)
4. 先崎理之, 松井晋, 江崎逸郎, 大畑孝二, 中村聡 (2021) 浜厚真の鳥類～浜厚真 Bioblitz2021 報告～. 石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク. (2025-1-08 参照)
5. 日本野鳥の会. 勇払原野保全構想に係る対象範囲南部・重要鳥類生息データベース. (2020-06-10 問い合わせ・参照)
6. 環境生活部環境局生物多様性保全課 (2019) 北海道レッドリスト【北海道】. (2025-1-08 参照).
7. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (2020) 環境省レッドリスト 2020. (2025-1-08 参照)
8. 北海道ラムサールネットワーク 浜厚真 Bioblitz2021 魚類データベース. (2021-12-05 問い合わせ・参照).
9. 浜厚真 Bioblitz2021 昆虫班 (2021) 浜厚真の節足動物～浜厚真 Bioblitz2021 報告～. 石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク. (2025-1-08 参照)
10. 浜厚真 Bioblitz2021 植物班 (2021) 浜厚真の維管束植物～浜厚真 Bioblitz2021 報告～. 石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク. (2025-1-08 参照)
11. Senzaki, M., Yamaura, Y., & Nakamura, F. (2015) The usefulness of top predators as biodiversity surrogates indicated by the relationship between the reproductive outputs of raptors and other bird species. *Biological Conservation* 191 460-468
12. Senzaki, M., Yamaura, Y., & Nakamura, F. (2017) Predicting off-site impacts on breeding success of the marsh harrier. *Journal of Wildlife Management* 81, 973-981

13. [環境省 \(2024\)風力発電事業におけるクマタカ・チュウヒに関する環境影響評価の基本的考え方.](#) (2025-1-08 参照)
14. [環境省自然環境局野生生物課 \(2016\)チュウヒ保護の進め方.](#) (2025-1-08 参照)
15. 浦達也, 長谷部真, 平井千晶, 北村亘, 葉山政治 (2019) 繁殖期のチュウヒが風力発電施設の建設により受ける影響とその行動. 自然保護助成基金助成成果報告書 vol. 28, 50-57
16. Rebke, M., Dierschke, V., Weiner, C. N., Aumüller, R., Hill, K., & Hill, R. (2019) Attraction of nocturnally migrating birds to artificial light: The influence of colour, intensity and blinking mode under different cloud cover conditions. *Biological Conservation* 233, 220-227
17. Shutoh, K., Michikawa, F., Igarashi, H., & Tsuyuzaki, S. (2025) Re-recognition of potentially introduced *Symphytotrichum ciliatum* (Ledebour) G. L. Nesom (Asteraceae) in Japan with notes for taxonomic confusion on typification of the species. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* (in press)

以上

II. 第72回日本生態学会大会の記録

第72回日本生態学会大会は札幌コンベンションセンターおよびオンラインにて2025年3月15日～3月18日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム 17、自由集会 28、フォーラム 10、一般講演(口頭発表)326、一般講演(ポスター発表)863、高校生ポスター62、ジュニア生態学講座が行われました。参加者は2471名でした。4日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日程

- 3月15日 公開講演会、授賞式、オープニングセレモニー、一般講演(口頭発表)、みんなのジュニア生態学講座、代議員会
- 3月16日 総会、受賞記念講演、シンポジウム、自由集会、フォーラム、一般講演(口頭発表、ポスター発表)、こども生態学講座
- 3月17日 シンポジウム、自由集会、フォーラム、一般講演(口頭発表、ポスター発表)
- 3月18日 受賞記念講演、シンポジウム、自由集会、フォーラム、一般講演(口頭発表、ポスター発表)

ポスター賞受賞者

<外来種/Introduced species>

【最優秀賞】

「種分布モデルを用いた侵略的外来種コウライオヤニラミの国内定着リスク評価」*森本昂、渡辺勝敏、辻冨月(京都大学)

【優秀賞】

「小笠原諸島の外来種グリーンアノールの睡眠時の止まり木の特徴」*猪森恒一朗、酒井理、岩井紀子(東京農工大学)

<菌類・微生物/Fungi and microbes>

【最優秀賞】

「シロアリの埋葬と巣材共生微生物との相互作用を介した巣の抗菌防御機構」*中島聖朗、松浦健二(京都大学)

【優秀賞】

「倒木更新木の土壌定着に伴う菌根の細胞外酵素活性特性の変化」*高橋穂乃花、安西楓、岡田慶一(東京農業大学)

<群落・遷移・更新/Plant community, succession and regeneration>

【最優秀賞】

「阿蘇における半自然草地の再生と管理放棄が大蛾類群集に及ぼす影響」*山口湜太、坂上翼(東京農業大学)、増井太樹(阿蘇グリーンストック)、今井伸夫(東京農業大学)

【優秀賞】

「全国の森林における枯死率の長期変動とその波及効果」*Ai OBATA (The Univ. of Tokyo), Yuya OGAWA (Japan Wildlife Research Center), Gen KUSAKABE, Tsutomu HIURA (The Univ. of Tokyo)

「草原再生を目指した阿蘇地域のスギ人工林皆伐地における12年間の植生変化」*渡部洋澄(熊本大学)、瀬井純雄(阿蘇花野協会)、高沢智嗣、尾下聖志朗、藤井紀行(熊本大学)

<行動/Behavior>

【最優秀賞】

「社会性吸虫のレジアにみられる攻撃行動と種間認識」*三浦健太郎、和田哲(北海道大学)、三浦収(高知大学)

【優秀賞】

「石の下を覗く: ヤマトクロスジヘビトンボの幼虫における闘争の過程とその結果」*Kai OKUYAMA, Satoshi WADA (Hokkaido Univ.)

「陸生等脚類の肉食性土壌動物に対する捕食回避行動」*遠藤祐人、大見川遥、阿部博和(石巻専修大学)

「刺激提示時の行動と心拍数の変化から探るアカウミガメの行動睡眠」*青田幸大、阪井紀乃、齋藤綾華、坂本健太郎(東京大学)

「グリーンランドの氷河フィヨルドにおけるワモンアザラシの潜水パターン」*櫻木雄太(北海道大学)、Aqqalu ROSING-

ASVID (Greenland Inst. Nat. Res.)、杉山慎 (北海道大学)、三谷曜子 (京都大学)

<植物個体群・景観/Plant population and landscape ecology>

【最優秀賞】

「オオイヌタデの防御形質多型に伴うフェノロジー変異は同所的な生殖隔離を促進するか」*矢野 文士 (鹿児島大学)、松田浩輝 (佐賀大学)、山尾 僚 (京都大学)、徳田 誠 (佐賀大学、鹿児島大学)

【優秀賞】

「同種個体の存在下で形質・環境・血縁度がブナ実生の展葉に与える影響」*多々納琴音 (岡山大学)、松本哲也 (茨城大学)、ヴァンリン (岡山大学)、赤路康朗 (国環研)、坂本圭児、廣部宗、宮崎 祐子 (岡山大学)

「環境条件がユモトマムシグサ近縁群の水平・垂直分布に与える影響」*前田夏樹 (信州大学)、柿嶋聡 (昭和大学)、高橋 耕一 (信州大学)

<植物生理生態/Plant ecophysiology>

【最優秀賞】

「オオバサガラにおける成木と幼木の生理生態学的形質の比較」*山内理紗、古館旦陽、澤上航一郎 (東京大・日光植物園)、渡辺綾子 (東京大・院理)、種子田春彦 (東京大・日光植物園)

【優秀賞】

「温帯樹種の成長-生存トレードオフを駆動するのは炭素収支か、樹形か、病原菌耐性か？」*山川真広、彦坂幸毅 (東北大学)

「相対成長速度の種間差を古典的手法と窒素獲得・利用に基づく手法の両方から評価する」*鈴木桂実、梶野浩史、廣川周作、富松元 (東北大学)、門脇浩明 (京都大学)、彦坂幸毅 (東北大学)

「Variation in leaf phenology and stomatal and anatomical traits of trees and their relationships in a seasonally dry tropical forest, NW Madagascar」*Seiya SUNAYAMA, Yutaro FUJIMOTO, Hiroki SATO, Kaoru KITAJIMA (Kyoto Univ.)

<植物繁殖・生活史/Plant reproduction and life history>

【最優秀賞】

「イシモチソウにおける不思議な同調開花」*満嶋輝 (神戸大学)

【優秀賞】

「一回繁殖型高山植物ミヤマリンドウの繁殖サイズのハビタット間比較」*佐藤海晴、工藤岳 (北大環境)

<進化・数理/Evolution and mathematical ecology>

【最優秀賞】

「比較ゲノミクスで明らかにするハチジョウノコギリクワガタ

の進化シナリオ」*岸野紘大 (名古屋大学)、若宮健 (東京科学大学)、井戸川直人、岡田泰和 (名古屋大学)

【優秀賞】

「イトヨにおける儉約遺伝子仮説の検証」*Bo-Jyun CHEN (SOKENDAI, National Institute of Genetics), JUN KITANO (National Institute of Genetics, SOKENDAI)

「アミメアリにおける自発的集合行動の動態解析：分岐現象への力学系アプローチ」*兼田典佳、土畑重人 (東京大学)

「メスの選り好み仮説はレック型一夫多妻の進化を説明できるか？」*一色竜一郎、大槻久 (総合研究大学院大学)

<生態系管理・生態学教育・普及/Ecosystem management and education and popularization of ecology>

【最優秀賞】

「環境 DNA を用いたタイ肝吸虫検出系の開発および感染症生態学への応用」*松尾 莉子 (神戸大学), Phoyphaylinh PRASAYASITH, Joseph Evangelista VALENCIA, Mark June Valiente REVOLTEADO (Niigata Univ.), Poom ADISAKWATTANA, Tippayarat YOONUAN, Orawan PHUPHISUT, Yanin LIMANONT (Mahidol Univ.), Marcello Otake SATO (Nupmls), Megumi SATO (Niigata Univ.), Tiengkham PONGVONGS (Savannakhet Health Department), 源利文 (神戸大学)

【優秀賞】

「放牧圧の集中と分散の違いによる植物・節足動物群集の多様性の変化」*王一勉 (横浜国立大学), Wenhui LI (InnerMongolia University), Xiaoming LU (IBCAS), 佐々木雄大 (横浜国立大学)

「外来ザリガニの不妊化手法確立と新たな改善策：抱卵阻害技術の可能性を探る」*齋藤淳也、田中一典、根岸淳二郎 (北海道大学)

<生物多様性/Biodiversity>

【最優秀賞】

「縮約ゲノム解析により推定されたシマドジョウ属の交雑の履歴と倍加の起源」*三内悠吾、高田喜光 (京大院理)、中島 淳 (福岡県保健環境研)、三品達平 (九大院農)、田畑諒一 (滋賀県立琵琶湖博物館)、渡辺勝敏 (京大院理)

【優秀賞】

「ジオ多様性による実生の種間・種内の形質変異形成：山腹崩壊実験によるアプローチ」*浜中修也 (北大・環境科学院)、坂井 励、小林真 (北大・FSC)、内海俊介 (北大・地環研)

「身近な自然への関心とその季節性の変化：オンライン検索数のコロナ禍前後の比較」*小見山紗英、中田和義、勝原光希 (岡山大学)

<動物と植物の相互関係/Animal-plant interaction>

【最優秀賞】

「ニホンザルの地域絶滅はヤマモモの実生更新に影響を与えるか? -種子散布距離の比較-」*渡邊彩音（名古屋大学）、戸丸信弘（名古屋大学）、半谷吾郎（京都大学）、中川弥智子（名古屋大学）

【優秀賞】

「植物間コミュニケーションの代償：ストレス下での抵抗性向上と成長抑制」*村山柊、櫻井裕介（新潟大学・院・自然）、西川孝一（新潟大学・農学部）、塩尻かおり（龍谷大学・農学部）、高林純示（京都大学・生態研）、石崎智美（新潟大学・理学部）

「落ち着かない野生ハナバチ：殺虫剤ジノテフランの毒性および行動影響の評価」*吉田風音、石若直人、平岩将良（近畿大・農）、横井智之（筑波大）、早坂大亮（近畿大・農）

「植食昆虫ハンノキハムシの宿主特殊性は森林の不均一性に依存するか?」*木立真凜（北大院・環境科学院）、内海 俊介（北大院・地環研）

<動物群集/Animal community>

【最優秀賞】

「生態系サイズ-食物連鎖長関係を地質が左右する?」*太刀掛脩平、加賀谷隆（東京大学大学院）

【優秀賞】

「亜高山性アブラムシに対する高温ストレスと宿主植物フェノロジーの相対的な影響」*石井和（千葉大・院・融）、飯島大智（都立大・院・観光）、村上正志（千葉大・院・理）

「ヘビの「呪い」：ヘビ類の臭い分泌物には高次捕食者を誘引して身を守る機能がある」*秋元洋希、細将貴（早稲田大学）

「ナマコの生物攪拌で何が起こる? 潮間帯の生態系への影響」*岩谷将文、和田葉子（宮崎大学）

<動物個体群/Animal population>

【最優秀賞】

「3 種共存域における種間競争からの解放がオショロコマ個体群に及ぼす生態学的影響」*Kenta ANRAKU, Akihiko GOTO（The University of Tokyo）, Taihei YAMADA（National Fisheries Univ.）, Kazutoshi UEDA（Public Consultant Co., LTD）, Kousei FUKUZAWA, Kentaro MORITA（The University of Tokyo）

【優秀賞】

「様々な降水パターンを想定した温帯性蚊の個体群動態の将来予測」*丸山みく、遠藤大志、太田俊二（早稲田大学）

「魚類の個体群動態の温暖化応答は形質に依存する」*大友優里（東北大学）、益田玲爾（京都大学）、近藤 倫生（東北大学、WPI-AIMEC）

<動物繁殖・生活史/Animal reproduction and life history>

【最優秀賞】

「K 戦略のクマムシ種: *Viridiscus perviridis* の特異な生活史」*Asami KUBA（Hokkaido Univ.）, Takuya K. HOSOKI（Hokkaido Univ., JSPS）, Osamu KISHIDA（Hokkaido Univ.）

【優秀賞】

「カブトムシの寿命：飼育下における平均寿命と野外個体の推定寿命の比較」*神田旭、洲濱志帆、友弘直樹、小島渉（山口大学）

<物質循環/Material cycling>

【最優秀賞】

「ミミズがダイズの緑肥由来窒素利用効率に与える影響：15N トレーサー法による定量評価」*菅原颯太、高階史章、佐藤孝、田中草太（秋田県立大学）

【優秀賞】

「コクワガタ幼虫による窒素固定活性とその森林生態系における役割について」*杉江洸太郎、保原達、吉田磨、松林圭（酪農学園大学）

「異なる植物機能群における葉群炭素・窒素動態の環境応答のシミュレーション」*城崎菜乃、田代萌（東北大学）、伊藤昭彦（東京大学）、彦坂幸毅（東北大学）

<保全/Conservation>

【最優秀賞】

「環境 DNA における精子特異的メチル化状態を利用したカワバタモロコ繁殖検出」*平山一楓、源利文（神戸大学）

【優秀賞】

「ゴルフ場の池に出現する動植物の特徴を探る一周辺の農業用ため池と比較して」*廣田瑞希、米口未来、渋谷真司、栗原悠人、畠山涼樹、河内香織（近畿大学）

「沈水植物群落の短期的な再生はシードバンクの密度上昇に寄与するか」*藤居隆之介（東京大学）、西廣 淳（国立環境研究所）

「北海道東部防風林における絶滅危惧種ゴマシジミの集団遺伝構造」*榊原正宗（兵庫県立大学）、速水将人（道総研・林業試験場）、大脇淳（桜美林大学）、中濱 直之（兵庫県立大学）

<高校生ポスター>

【最優秀賞】

「視覚刺激がカメの行動・知能に与える影響とカメのヒト個体識別能力」部家司（金沢大学附属高等学校）

「ホシザキユキノシタの花弁が退化した理由～訪花昆虫と花卉の形態進化の関係を探る～」熊谷緋沙子（千代田区立九段小学校）

「ササゴイは流速および捕食地点の環境要因に基づいて捕食行動を選択する」池田和佳、田中由羽衣、渡邊美友、杉水蒼空、東かず葉、中本樹（熊本中央高・生物探究）、岡本 浩太郎

(熊本中央校高校)

【優秀賞】

「奈良県生駒市におけるツバメの給餌行動の観察と給餌内容の解析」萩原樹 (奈良女子大学附属中等)

「岐阜のオオサンショウウオを守る～国産個体の生息地を交雑個体から取り戻すために～」河合七香、藤井飛燕、田中隆太郎、栗井佑果、安藤有未、志田和樹、安藤芽唯、陳仕煜、高木雅紀 (大垣北高等学校)

「魚の消化管内からマイクロプラスチックを探索！」小柳蒼太、友常伶、佐渡志穂里、河田瑞葵 (都立国分寺高等学校)

「地球温暖化が森林生態系の炭素収支に与える影響とバイオチャーによる炭素固定能の改善」工藤良史、小山悠太 (浅野中学・高等学校)

「カシノナガキイムシの菌嚢の配置について」井上碧人、岩前宏武、春日暁弥 (東京都立川高等学校)

【審査員特別賞】

「日本のイモリ属の繁殖生態はどのように獲得されたか。」大久保亜美 (山脇学園高等学校)

「絶滅危惧種ネビギサにおける有性生殖が制限されている要因と生育環境の解明」永田帆帆子、谷口嘉乃、梅澤亜未、中谷絢子、川端莉子、笠嶋優衣 (明石北高等学校)

「ニホンリスの生態調査～岡山県高梁市における森のエビフライ屋の実態～」藤井奏愛、清板すみれ (清心女子高等学校)

「海洋ゴミと環境 DNA 解析による静岡県焼津の魚類相の季節変動の推察」谷澤陸斗、濱田久温 (焼津中央高等学校)、藏園陽生 (大垣南高等学校)

「トンボの翅を切りトンボ～トンボ類の翅における数学的構造規則性～」檜崎晃生、小林将大、水谷架士羽、山本菜帆、寺本龍翔、是賀柳之介 (浜松学芸高等学校)

「ニホンザリガニの生態調査と保全に関する考察」松村和音 (クラーク記念国際高校)

英語口頭発表賞 (English Presentation Award) 受賞者

<Material cycling>

【Best English Presentation Award】

“Factors of interspecies differences in mercury contamination in seabirds: a meta-analysis across the globe” Jumpei OKADO, Chinatsu NAKAJIMA, Futoshi UJIE (Nagoya Univ.), Fischer H JOHANNES, Olivia ROWLEY (Dep.of Conserv.,NZ), Yasuaki NIIZUMA (Meijo Univ.), Akiko SHOJI (Nagoya Univ.)

<Biodiversity>

【Best English Presentation Award】

“Biodiversity consistently promotes ecosystem multifunctionality across multiple temporal scales in aquatic microbial communities” Wan-

hsuan CHENG (Natl.Taiwan Univ.,Ryukoku Univ.), Takeshi MIKI (Ryukoku Univ.), Chao-Chen LAI (Natl.Taipei Univ.of Edu.), Fuh-Kwo SHIAH (Academia Sinica), Chia-Ying KO, Chih-hao HSIEH, Chun-Wei CHANG (Natl.Taiwan Univ.)

<Animal population, Life history of animals, Animal reproduction>

【Best English Presentation Award】

“Latitudinal clines of river-ocean dependence in a migratory salmonid: Does climate change reduce migratory behavior?” Akihiko GOTO, Kentaro MORITA, Mari KUROKI (The University of Tokyo)

<Ecosystem>

【Best English Presentation Award】

“Exploring the Mitigation Capacity of Urban Green Spaces in Tokyo” Cathlyn SUIZO, Takeshi OSAWA (Tokyo Metropolitan University)

<Animal-plant interaction>

【Best English Presentation Award】

“Mutualistic adult networks, rather than antagonistic larval networks, may matter for the stability of hybrid ecological communities” Yi-de LEE (NCKU, Taiwan), Akihiko MOUGI (Shimane Univ.), Takefumi NAKAZAWA (NCKU, Taiwan)

【Excellent English Presentation Award】

“Tracing the evolution of herbivory: insights from fossils of insect-damaged leaves” Kakemu FUJII (Kyoto Univ.), Atsushi YABE (NMNS), Hirokazu YUKAWA (FPDM), Yume IMADA (Kyoto Univ.)

<Conservation>

【Best English Presentation Award】

“The positive effects of short-term water reservation in croplands on migratory waterbirds” Takehiko SHIMIZU, Masayuki SENZAKI (Hokkaido University), Shunsuke HORI (Docon Co.,Ltd.), Kota SUEDA, Shintaro ICHIHARA, Daiki WAGA, Kota HIROBE, Ryugo ISHIDA, Jou YOSHIGAI (Hokkaido University)

【Excellent English Presentation Award】

“The interactive effect of climate and land-use stressors on the presence/absence of an endangered crayfish species in Japan” Wei JIA, Itsuro KOIZUMI (Hokkaido University)

<Plant population, Life history of plants, Plant ecophysiology>

【Best English Presentation Award】

“Non-linear warming responses and thresholds of tundra plant-soil interactions and functionality” Kohsuke TANIGAWA, Paul KARDOL, Sandra JÄMTGÅRD (Swed.Univ.Agric.Sci.), Aimée CLASSEN (Univ.Michigan), David WARDLE (Umeå Univ.)

<Mathematical ecology>

【Best English Presentation Award】

“Cannibalism and intraguild predation benefit consumer persistence

despite negative impact on individual performance” Hsiang-chih LO, Po-ju KE (National Taiwan University)

<Succession and regeneration>

【Best English Presentation Award】

“The quantitative analysis of root distribution patterns of herbaceous species by scanner images on post-mined peatland, Sarobetsu mire” Chen ZHAO (Hokkaido Univ.)

<Animal community>

【Excellent English Presentation Award】

“Stability analysis of multispecies communities targeting bacteria” Genta SHIMA, Hirokazu TOJU (Kyoto Univ.) , Kenta SUZUKI (RIKEN)

“Responses of marine sessile community to artificial light at night” Kyoko TSUGANE, Masahiro NAKAOKA (Hokkaido Univ.)

<Plant community>

【Best English Presentation Award】

“Understanding the ecological strategy of dominant tree species from their height-diameter relationships in a seasonally dry tropical forest” Yutaro FUJIMOTO, Daniel EPRON, Takayuki KANEKO, Hiroki SATO (Kyoto Univ.) , Ando Harilalao RAKOTOMAMONJY (Kyoto Univ., Univ. Mahajanga) , Kaoru KITAJIMA (Kyoto Univ.)

<Behavior>

【Best English Presentation Award】

“Extraordinary thermoregulation abilities of shortfin mako sharks as the key adaptive significance of regional endothermy in fishes” Soma TOKUNAGA (SOKENDAI) , Wei-Chuan CHIANG (Fisheries Res. Inst.) , Itsumi NAKAMURA (ECSER, Nagasaki Univ.) , Rui MATSUMOTO (Okinawa Churashima Foundation) , Yuuki Y WATANABE (SOKENDAI, RCIES)

【Excellent English Presentation Award】

“Cleaner fish that perform mirror self-recognition increase their body size assessment as their memory decline, suggesting the metacognitive capacity” Taiga KOBAYASHI, Masanori KOHDA, Satoshi AWATA, Shumpei SOGAWA (Osaka Metropolitan University)

<Evolution>

【Best English Presentation Award】

“Adaptation to iodine-deficient environments in the stickleback” Hiroyuki KANBE (SOKENDAI, National Institute of Genetics) , Yoshiki SUZUKI (Shizuoka University) , Takuya HOSOKI (Hokkaido University FSC) , Haruka YAMAZAKI, Genta OKUDE (National Institute of Genetics) , Yo YAMASAKI (SOKENDAI, National Institute of Genetics) , Akiteru MAENO (National Institute of Genetics) , Atsushi NAGANO (Ryukoku University, Keio University) , Atsushi TOYODA (National Institute of Genetics) ,

Makoto KUSAKABE (Shizuoka University) , Jun KITANO (SOKENDAI, National Institute of Genetics)

【Excellent English Presentation Award】

“Evolution of Seasonal Gene Expression Dynamics in Fagaceae Trees” Shuichi KUDO, Yuka IKEZAKI, Junko KUSUMI, Hideki HIRAKAWA (Kyushu Univ.) , Sachiko ISOBE (Univ. of Tokyo) , Akiko SATAKE (Kyushu Univ.)

III. 業務執行理事の選任について

2025年3月18日に2025年度第1回理事会が行われ業務執行理事が選任された。

業務執行理事（任期：2025年3月～2027年3月）

内海 俊介（専務理事）

半場 祐子（庶務担当理事）

山尾 僚（会計担当理事）

IV. 代議員の欠員補充について

中国四国地区選出代議員鈴木紀之氏が所属地区変更になるため、2025年4月より中国四国地区次点の三村真紀子氏を代議員とすることが2024年第4回理事会にて承認された。

V. 寄附一覧

この度は日本生態学会へご支援いただき心から感謝申し上げます。本ご厚意を生態学の進歩・発展・普及を図る活動に寄与したいと存じます。今後とも何卒より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。※敬称略

2024年12月

・株式会社シンク・ネイチャー（「自然史研究振興賞」への寄附金20万円）

VI. 書評依頼図書（2024年11月～2025年3月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 白藤梨可・八田岳士・中尾亮・島野智之(編著)「マダニの科学—知っておきたい感染症媒介者の生物学—」(2024) 228pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17194-5
2. 佐藤幸恵・鈴木丈詞・笠井敦・伊藤桂・大井田寛・日本典秀・島野智之(編著)「マダニの科学—知っておきたい農業害虫の生物学—」(2024) 248pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17193-8

3. ジョナサン・B. ロッソ著・的場知之訳「ネコはどうしてニャアと鳴くの？すべてのネコ好きに贈る魅惑のモフモフ生態学」(2025) 480pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-2400-1
4. 日本生態学会監修「フィールド調査のための安全管理マニュアル」(2025) 184pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18070-1

書 評

石井実・平井規央・上田昇平・平田慎一郎・那須義次編著
「環境動物昆虫学のすゝめ—生物多様性保全の科学」(2024)
448pp. 大阪公立大学出版会 ISBN-13: 9784909933775 定価
5,000 円+税

地球環境が急速に悪化しつつある昨今において、生物多様性の保全は緊急的ともいえる課題である。それでは、生物多様性をいざ保全する際に、どういったことを理解しておく必要があるだろうか。

考えてみれば当たり前のことかもしれないが、生物多様性を保全する現場では、ありとあらゆる知見が求められる。対象とする生態系にはどのような生物が生息しているのか？保全にはどのような土地管理が必要か？どの程度の面積を保全区域とすべきか？対象生物の生活史は？種多様性はどの程度なのか？どのような歴史をたどってきたのか？生息地間の遺伝的分化はどの程度か？共生生物は？天敵は？…。あらゆるすべての問題を 1 つの研究成果だけで解決できることはほぼない。しかし残念なことに、対象となる生物が昆虫をはじめとする無脊椎動物の場合、種数は膨大な一方で現在の蓄積されている知見がまだまだ足りないのが現状である。昆虫は農作物の送粉、物質循環、生物遺骸の分解など、生態系において非常に重要な役割を担っているにもかかわらず、だ。

本書では「はじめに」で「環境昆虫学を人と昆虫・動物との共存に向けて調査・研究する実学的な学問分野」ととらえている。実学的とは銘打たれているものの、一方で基礎科学も重要視されているのは素晴らしい。特に昆虫をはじめとする無脊椎動物では、まだまだ分類学的な検討が不十分、つまり種の多様性情報が十分にわかっていないことも多い。こうした生物多様性のインベントリー情報としての分類学的重要性についても、本書ではベニボタルやムクゲキノコムシ、ハナカメモシ、小蛾類などの事例からしっかりと解説されている。ほかに、各種の昆虫の生活史解明、DNA から明らかになった保全単位や系統関係の推定、博物画や標本コレクションからの過去のチョウ類相の推定など、非常に多角的な視点から研究がなされている。そのどれもが、生物多様性保全に欠かせない重要なパズルピース

スである。

さらに、実践的な保全研究についても焦点が当てられている。現在ニホンジカが日本各地で生態系に大きな影響を及ぼしていることはよく知られているが、それらが絶滅危惧種の昆虫(本書ではギフチョウ)に及ぼす影響だけでなく、行政による対策などが解説されている。ビオトープの池干しなどは近年メディアでしばしば注目されるが、それによる昆虫群集などの経時的なデータも示されている。いずれもフィールドワークに基づくデータであり、とても説得力のある内容となっている。

ただし、あくまで本書では生物多様性を保全するために必要なパズルピースの一部が示されているに過ぎない。一方で、研究成果を得るためにどのようなアプローチをすればいいのか、それぞれの章で事細かに解説されている。生物多様性保全の現場に携わる社会人の方々はもちろん、生物多様性の保全研究に興味を持つ若い方々にも是非とも一読をお勧めしたい。

(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 中濱直之)

トム・レンスター 著 春名太一 訳「エントロピーと多様性の数理」(2024) 472pp. 森北出版社 ISBN: 978-4-627-08291-5
定価 9,460 円

多様性は難しい概念である。多様性を定量化し解釈するのは、生態学の中心課題である。だが diversity index という用語を Web 上で検索すると、信じられぬほど多様な多様性指標が見つかる。多様性指標が多様化しているといわれるほどだ。

本書は、ある状況(仮定)ではその問題が解決可能であることを力強く説得する。評者は、本書の原著“Entropy and Diversity”(Tom Leinster 著、Cambridge University Press)を無料公開と同時に読み始めた。Tom にメールを送りやりとりし、オンライン講演会も開催した。交流を通じて評者が受けた印象は、「Tom の書き方・話し方・構成の仕方の、徹頭徹尾した明確さ」であり、それは本書にも徹底的に反映されている。評者の知らなかでは未曾有な標準でわかりやすく多様性指標について書かれてある。

本書は数学的な内容を多く含むため、評者なりの生態学的な補足をおこない内容を分析する。ただしこれらはあくまで評者によるものであり、客観的分析に必ずしも基づかないし、著者・訳者の思想を反映するものでもない。また、「訳者」と「評者」の読み違いを防ぐために、属人的な印象を与える可能性を考慮しつつ、一人称を「私」とした。

書評にうつる前に本書の一貫したスローガンは「公理的特徴づけ」:

概念 X の諸性質 $P(X)$ から、 X を表現する量・モデル・関数を構築しよう!

である。

書評にうつる。まずは諸関数方程式、Shannon エントロピーの説明から始まる。ここで説明される内容は早速、公理的特徴づけである。この方法の絶好の適用対象が、本章の主眼である Cauchy 方程式である。これは最も単純な結論を導けるので、すこし説明する。

実数 a を固定して、実数 x についての連続関数 $f(x) = ax$ を考える。この f が性質 P:「すべての数の組 (x, y) について、Cauchy 方程式 $f(x+y) = f(x) + f(y)$ を満たす」を持つのは、自明だ。

しかし、Cauchy 方程式から $f(x) = ax$ (ただし a は定数) を求める、つまり連続関数 f であって性質 P を満たすものが定数係数 a の自由度を残して $f = ax$ のみであることを示すには、大学数学の解析学が必要である。一般に、性質から量を導出するのは量から性質を導出するよりも遥かに難しい。同様に、「多様性指標 Y は、性質 P(Y) をもつ」という命題は簡単に証明できても、「性質 P をもつ多様性指標は Y だけである (ゆえに Y を多様性指標として用いるのは妥当である)」という逆命題の証明は難しい。だから、多様性指標を学んでも、その妥当性に納得するのが難しい (脚注 1)。

ここまでの段階では、エントロピーと多様性の関係は不明かもしれないが、大雑把には、
多様性 = exp(エントロピー)
である。つまり多様性とエントロピーは、数学的には行き来できる。ただし、本書でも説明があるとおり、多様性とエントロピーが等価というわけではない (脚注 2)。

第 3 章では、相対エントロピー (Kullback-Leibler 情報量; KLD) の説明がなされる。生態学的には KLD は、1 つの確率分布 (群集) $\mathbf{r}$ からみた、別の群集 $\mathbf{p}$ の相対的な非類似性を表す。ベータ多様性が複数の群集の非類似性を表していることを思い出すと、大雑把に言えば exp(KLD) がベータ多様性指標である。

第 4 章は Shannon エントロピーの変形、いわば Shannon エントロピーの一般化についてである。特に、パラメータ q をもつ Rényi エントロピーが生態学・遺伝学においては重要である (特に $q=0, 1, 2$)。この Rényi エントロピーの指数関数をとると、Hill 数という多様性指標を得る (Hill 1973)。つまり、Shannon エントロピーを一般化することで多様性指標が導かれる。

第 5 章は平均という概念の公理的特徴づけである。平均値というのは、多様性指標と同様、算術平均、幾何平均など、定義を変えたら結果が変わる量の典型である。本章では、データを適切に要約する平均値 M という関数を公理的に特徴づける。

たとえば、ある集団の各個体の形質値 (正) を測定し、それを $(x, y, \dots, z)$ とリスト化する。形質値の集団平均値 M を考える

と、 M は以下の性質を満たすべきである。

- (1) 全ての個体が同じ形質値 (つまり $x=y=\dots=z$) である場合、 $M=x$ である;
- (2) ある個体の形質値 x を大きくすると、平均 M も大きくなる;
- (3) 個体の名前の付け間違いで x と y を入れ替えても M の値は不変である;
- (4) 同じ個体数を持つグループに分割してから集計してもよい;
- (5) 全個体の形質値を c 倍すると、 M も c 倍になる。

以上の性質をもつ関数として、平均を表す関数 M を、一つのパラメータに関する自由度を残して、一意的に構成できる (実は (1) は (4) かつ (5) から証明できる)。平均というのは実は集団の要約的指標として数学的に構成可能な量なのである。この考え方をういて、7 章で多様性指標を公理的に特徴づける。

第 6 章は種の類似度を考慮した多様性指標の定義が説明される。一般に、多様性指標には類似度の考慮が必要なことがある。これこそが、著者らによる研究、Leinster & Cobbold (2012) の鍵である。本章後半に登場するマグニチュードという量も、著者その人が提案した数学的概念で、非常に豊かで面白い性質をもつ。私自身も刺激をうけ、この概念についての生物学的研究を始めた。「読書百遍義自ずから見る」である本章を、ぜひとも生態学的興味を持って読まれることを推奨する。

第 7 章は、value (価値) という概念の公理的特徴づけである。ここでの value とは、文字通り何らかの値であれば何でも良い。たとえば、種 i の value としての v_i は、種 i の形質値、個体数、生息範囲面積、ニッチ、保全対象としての価値、など i に関連付けられている限り任意である。ここでは特に v_i を、多様性指標への種 i の貢献度と考えると良い。

本章では、生態学者にとっての最大の関心ごとである結果が示される。そのため、この章を読むだけでも、この本を手にとる意義がある。それが定理 7.4.3、多様性指標としての Hill 数の公理化である。その内容は、以下である (もとのアプローチは Routledge 1979 によるもので、本定理はその緻密化である):「群集の相対頻度分布 $\mathbf{p} = (p_1, \dots, p_N)$ が与えられたとき、その群集の多様性を表現している関数 $D(\mathbf{p})$ が満たすべき以下の 6 つの性質を決めると、多様性関数は 1 つのパラメータ q に関する自由度を残して一意に定まり、それが Hill 数 D_q である」:

- (1) 不在種 (個体数ゼロ) をデータに追加しても $D(\mathbf{p})$ は不変;
- (2) 種の名前を入れ替えても $D(\mathbf{p})$ は不変である;
- (3) $D(\mathbf{p})$ は、頻度分布 $\mathbf{p}$ に関してある意味で連続的に変化する;
- (4) 1 種だけの群集の多様性は 1 である;

(5) $D(p)$ はある意味での分解可能性をもつ；

(6) すべての個体が同頻度で分布するなら多様性は種多様性である。

この6つの性質の意味を理解することで、Hill 数の妥当性に納得できる。なお D_1 は種多様性、 D_1 は Shannon の多様性、 D_2 は Simpson の多様性である。つまり Hill 数は一意的であるばかりか既知の多様性指標を網羅する。

なお、訳を批判する意図は全くなく、value が「価値」と訳されていたのは、少し意外であった（私の理解では、「価値」というより「値」）。しかし数学において一般に value が価値と訳されるのが通例である可能性もある。

第8章では、相互情報量という情報理論的概念を用いて、メタ群集の多様性指標、アルファ・ベータ・ガンマ多様性、そして群集の冗長性などが定義される。この定式化は、Whittaker によるものを完全に踏襲し、Hill 数とも整合的である (Whittaker 1972)。古典に立ち帰ることの重要性を痛感する。

第9章では、母関数や Legendre 変換などの確率的手法や、ノルムや一般化平均への公理的特徴づけが紹介されている。これら方法は、少し文脈にそぐわない印象を受けるだろう。しかし、一見すると決定論的で確率性の入り込む余地のなさそうな学問においても、確率論が便利となるケースは非常に多い。たとえば、サンプル数が大きい場合の指標の挙動を考えるのは、常套手段である。想像力をはたらかせながら読まれると良いだろう。

第10章は、情報損失についてであるが、生態学的解釈が一見難しそうな章である。基本的な考え方は以下の通りだ。生物群集の相対頻度分布 p と、多かれ少なかれ種を共有する別の相対頻度分布 q があるとすると、分布 q が分布 p からの時間変化で生じたものとみなすと、 q は p の持つ情報をいくらか失っている（あるいは、 p から見ると q には「意外性」がある）。その公理的特徴づけが本章の主題である。大雑把には、群集組成の時間経過で群集の多様性指標はどう変化するかという問題に相当し、これは熱力学第二法則に関連する。関連する問題については、評者の論文を参照していただきたい (Adachi, Iritani & Hamazaki, 2022; Godsoe, Murray, & Iritani, 2022)。

第11、12章はやや抽象的な数学内容が紹介され、多様性指標の数学的奥深さがみてとれる（詳しい内容は、字数の制限から割愛する）。

以上が本書のあらましである。小難しい印象をもたれる方が一定以上いるのは承知である。だがそもそも生態学・多様性研究では、「100%正しい答え」のない、難しい問題に取り組むものだ。そして本書は生態学の豊富な事例を用いており、生態学的な意味も理解できるよう工夫が施されている。

本書で紹介される公理的方法は、「新しい指標を提案した」と

主張する論文に対して、「適切な性質に基づいて量が構築されているか?」という論理的分析を行う手助けにもなるだろう。多様性を研究する生態学に興味のある人たちにとって、今四半世紀を代表する必携書であるという評価で、本書評を締め括りたい。

森北出版株式会社より本書を恵贈賜ったことに、心より御礼申し上げる。黒田真也氏、高柳龍氏、中臺亮介氏からの本稿へのコメントに感謝する。本稿に不明瞭さがあつた場合、責任は完全に私にある。

■脚注1: この事情は、情報理論でも共通だ。エントロピーが満たす性質は単純でも、それら単純な性質からエントロピーという関数を構成可能かどうかがすぐにわからない。しかし、この公理的特徴づけこそ、Shannon の方法だった (Shannon 1948, Faddeev, 1956)。つまり Shannon エントロピーは公理的に特徴づけられている。Shannon エントロピーは有用なだけではなく情報量を表す概念として極めて自然な性質を有するように構築されている。

■脚注2: Shannon エントロピーを多様性指標そのものとして用いるのは、問題がある。その例が2.4.11にある。もともとは生態学者 L.Jost によって考案された (Jost 2006, 2007)。たとえば、大雑把に言えば種数が10から100に増えたときは「 $100 \div 10 = 10$ 倍になった」とカウントするのが多様性指標で、「 $\log(100) \div \log(10) = 2$ 倍になった」とカウントするのがエントロピーである。どちらがより直感的にわかりやすいだろうか。

引用文献：

- Adachi, K., Iritani, R., & Hamazaki, R. (2022). Universal constraint on nonlinear population dynamics. *Commun Phys*, 5.1. DOI: 10.1038/s42005-022-00912-4.
- D. K. Faddeev. (1956). К понятию энтропии конечной вероятностной схемы. *Успехи математических наук*, 11:227–231.
- Shannon, C. E. (1948). A mathematical theory of communication. *Bell System Techn J*, 27:379–423.
- Godsoe, W., Murray, R., & Iritani, R. (2022). Species interactions and diversity: a unified framework using Hill numbers. *Oikos*, DOI: 10.1111/oik.09282.
- Hill, M. O. (1973). Diversity and evenness: a unifying notation and its consequences. *Ecology*, 54.2, pp. 427–432. DOI: 10.2307/1934352.
- Jost, L. (2006). Entropy and diversity. *Oikos*, 113.2, pp. 363–375. DOI: 10.1111/j.2006.0030-1299.14714.x.
- (2007). Partitioning diversity into independent alpha and beta components. *Ecology*, 88.10, pp. 2427–2439. DOI: 10.1890/06-1736.1.
- Leinster, T. & Cobbold, C. A. (2012). Measuring diversity: the

importance of species similarity. Ecology, 93.3, pp. 477–489. DOI: 10.1890/10-2402.1.

Routledge, R. D. (1979). Diversity indices: Which ones are admissible? J Theor Biol, 76.4, pp. 503–515. DOI: 10.1016/0022-5193(79)90015-8.

Whittaker, R. H. (1972). Evolution and measurement of species diversity. Taxon, 21.2-3, pp. 213–251. DOI: 10.2307/1218190.

(理化学研究所・数理創造プログラム 入谷亮介)

前田太郎・岸茂樹著「虫がよろこぶ花図鑑: ミツバチ・ハナバチ・ハナアブなど」(2025) 224pp. 農山漁村文化協会 ISBN: 978-4-540-24113-0 2420 円 (税込)

「ぽかんと花を眺めながら、人間も、本当によいところがある、と思った。

花の美しさを見つけたのは人間だし、花を愛するのも人間なもの。」とは、太宰治の小説『女生徒』に出てくる一節である。私たちは折に触れ、花を眺め、花を愛でている。春先から秋は、多くの花に出会える良い時期である。大学や会社のオフィスでの仕事の合間に、外へ出て花を眺めてみよう。赤や黄、紫、白、ピンク、青……と多様な色の花がそこかしこに咲いているだろう。花を咲かせる植物は野生の植物だけでなく、植栽植物や外来植物と幅広い。せっかくなら、小さな我が家でも庭やプランター、植木鉢で花々が咲き誇る庭にしてみたい。そんな時、どんな花を植えようかと考えるだろう。植物図鑑を開いて気に入った花を見つけては、株や苗を植えるかもしれない。そうしていると、花に訪れている昆虫にも目がいく。昆虫好きでなくとも、花にきたチョウが花蜜を吸ったり、ハナバチがせわしなく花粉を持ち去ったりする光景は見ていると気持ちがよいものである。

もっと詳しくみていくと、カラスノエンドウにはヒゲナガハナバチが、カタバミにはコハナバチの仲間やハナアブがやってくる。ただし、すべての花に同じ昆虫がやってくるわけではないし、花によっては自分が期待していたような昆虫がこない場合もある。その時にはたと気づく。どんな花を植えると、どんな昆虫がやってくるのであろうかと。植物図鑑を開いても、訪花する昆虫の情報はほとんど載っていない。一部の図鑑には、わずかに情報の情報が載っている。こんな状況で役立つのが本書である。

農研機構の研究員である著者2名がつくり上げた本書では、「昆虫が好んで訪花する」植物が紹介されている。本の帯には、虫の目線からみた花の五つ星ガイドと銘打たれており、昆虫たちにとっては必見の図鑑となっている。もちろん昆虫が本書を読んでそれぞれの花を訪れてくれるわけではない。そのため私たち人間が、昆虫に喜んでもらえる庭や周辺環境づくりを行

なう上で重要な知見を提供してくれている。本書が対象とする読者層は幅広い。ガーデニングを楽しもうとする一般市民や研究者、さらに養蜂業者まで、花にやってくる昆虫を愛でるだけでなく生業とする方まで必見である。ただし本書で着目している昆虫は、花粉を体に付着させて花から花へと飛び回り、植物の「受粉」に貢献している、ミツバチやマルハナバチといったハナバチの仲間やハナアブ、ハエの仲間であることに留意しておきたい。とはいえ、紹介されている花には、これらの昆虫以外にもコウチュウやチョウの仲間も頻りに訪れるものが多いので、参考にはできるだろう。

本書では、175 種類の花について春夏秋冬の3つの季節に分け、さらに季節ごとに花の色で分けて紹介している。紹介されている花は、日本の在来植物から農作物の花、園芸植物まで及ぶ。いずれも私たちの身近な場所で見かけるものばかりである。農研機構に所属している著者であることから、農作物の花も盛り込まれており、ガーデニングや養蜂だけでなく、家庭菜園を始める方にとっても有益な内容となっている。花の名前を知らなくても、季節と色の組み合わせによって花を特定し、訪花する昆虫を調べることもできる。各花の紹介ページでは、美しい花と、それぞれに訪花する昆虫の写真が載せられており、図鑑として申し分ないだろう。さらに本書の特徴ともいうべきものが、訪花する昆虫、花のサイズ・花の色・香りの好み・蜜量と糖度・花粉のサイズと数というカテゴリーである。訪花する昆虫にとっては花の大きさや色、においだけでなく、その花が生産する花蜜や花粉の量が重要になってくる。それらの情報はチャート図や5段階のランキング評価といった方法で、視覚的にわかりやすく掲載されている。研究者が読むと、非常にざっくりとした情報にみえるかもしれないが、一般読者にとって専門性が高すぎずは、とっつきにくくならない。本書は入門書として「ちょうど良い」さじ加減となっている。

本書の魅力は、昆虫にとって好ましい花を紹介しているだけではない。花粉を運び、受粉に貢献してくれる昆虫たちが直面している現状についての解説やコラムも載っている。さらには研究者が実際に行なっている調査方法まで書かれている。専門的な情報ではあるが、花の形や匂い、色、花粉や花蜜の量、糖度の計測に至るまで細やかであり、研究を始めようとする大学生や若手の研究者にとってもありがたいに違いない。

咲き誇るさまざまな花々とそこに訪れている昆虫たちとの関係は、私たちの身の回りでよくみかけるものである。一方で、気候変動などの環境の変化に伴い、多くの昆虫たちが私たちの身の回りから姿を消しつつある。この状況を改善するためには何ができるだろうか。難しいことは考えず、まずは本書で紹介されているような花々を、自分の庭やベランダにでも用意してみてもどうだろうか。花々に囲まれた環境は、人間自身だけで

なく、昆虫たちの Well-being の向上にもつながっていくだろう。
(筑波大学大学院生命環境系 横井智之)

西廣淳・瀧健太郎・原田守啓・宮崎佑介・河口洋一・宮下直著
「人と生態系のダイナミクス5 河川の歴史と未来」(2021)
152pp, 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18545-4 定価2,970円

本書は、河川、水田における生物、防災・減災について、平易な言葉で、詳しく記載されている。よって、生きものやまちづくりに興味がある高校生、大学生、社会人にとって有益な情報を提供してくれる。生きものは植物と動物の両方を、まちづくりは霞堤などの伝統的河川工法から、現代の連続堤までを扱っている。

本書は、最新の学術的知見を含み、今後の研究課題も示されている。たとえば、『連続堤と比べ、洪水時には河川とつながる霞堤付近の場所は、氾濫原の生物の生息場として重要であると考えられる。しかし、そのような研究は進んでおらず、今後の課題である。』

本書は、攪乱の重要性を述べている。『氾濫原や水田では攪乱が多い。このような場所に生息・生育するのが、ドジョウ、コイ、フナ、ナマズなどの魚類、カワラハンミョウ、カワラバタなどの昆虫、カワラノギク、カワラサイコ、カワラハハコなどの植物である。しかし、近代化により上流域にダムが建設され、流量が安定し、かつてのような攪乱が生じにくくなっている。このような河川のとくに扇状地の環境の安定化が、上述の生物を絶滅の危機に追いやっている。』このことは、ダムの建設というハード面だけでなく、湖沼の水位操作というソフト面にも言える。たとえば、『霞ヶ浦では自然に存在していた水位の季節変動のうち、夏から秋の水位上昇は治水を目的とした管理のため、冬から春の水位低下は利水を目的とした管理のために生じなくなり、水位の季節変動が失われた。水位変動の喪失は、湖岸の植物の種子からの更新を阻害するほか、地形の浸食を加速するなど、湖沼の生態系に大きな影響をもたらしている。』拙稿の紹介となり恐縮だが、水位操作が生物に及ぼす影響に関しては、霞ヶ浦だけでなく、琵琶湖でも報告されている(Matsui 2014)。

これらの対策として、本書は生物が豊かだった昔に戻すのではなく、近代化の恩恵も評価しつつ、最適解を見い出すことが大切と述べている。つまり、『河川整備により、洪水災害による死者・行方不明者数は着実に減少している。また、水田の圃場整備により、稲作労働時間は確実に減少している。河川と水田の近代化は、間違いなく、安全で豊かな社会の構築に貢献し、経済成長と人口増加を支えてきたのである。』この観点は、これからのまちづくりを進める上で非常に重要であり、都

市計画や農村計画などのまちづくりに携わる行政者および技術者にとっての拠り所になるだろう。

気候変動に伴う災害の増加は近年顕著である。『自然災害リスクの大きさは、ハザード、曝露、脆弱性の3要素の積集合で表される。気候変動に伴って増大するのはハザードである。ハザードが増大し、河川の水が堤防を越えてあふれてきても、そこに人や財産が存在しなければ、すなわち曝露が避けられていれば、実際のリスクは大きくない。また、仮に洪水が襲ってきても、避難や災害後の助け合いがスムーズにできれば、すなわち脆弱性が低ければ、被害は抑制できる。日本の人口は減少に転じたことから、地形的に危険な、かつては河川の氾濫原であった低地の平野部にあえて住む必要はなくなった。私たちは改めて、河川と向き合った暮らしや、河川の特徴を踏まえたまちづくりの方向に舵を切るべきだろう。この方向性は、河川がもたらすリスクと向き合うという厳しい側面だけでなく、心の休まる風景やさまざまな生物の存在、子どもの健全な発達を助ける体験の機会など、河川の恵みを大切にする側面ももつはずである。』

最後に、『ここまで一方的に野生の動植物の多様性や量を減らす関係が生じたのは、最近50年ほどに過ぎない。』つまり、私が生きてきた歳月と一致する。私は、何としても我々の世代でこれらの減少を食い止め、ベクトルを反転させなければならぬと感じた。

Matsui, A. Relationship between distribution and bottom sediment of submerged macrophytes in the Seta River, Shiga Prefecture, Japan. *Landscape Ecol Eng* 10, 109–113 (2014).

<https://doi.org/10.1007/s11355-012-0192-5>

(福井県立若狭高等学校 松井明)

桜井良著「環境教育プログラムの評価入門」(2024) 208pp,
毎日新聞出版 ISBN:978-4-620-55020-6 定価2,200円

本書は、評価について、さまざまな方法が記載されている。自然科学ではなく、社会科学における評価方法が紹介されているため、自然科学を専門としている者が多いと思われる日本生態学会会員にとっては、内容が物足りないと感じるかもしれない。

しかし、環境教育を実践されている小・中・高等学校の教員にとって、その評価方法を提供しているため、有益である。小・中・高等学校の教員は日々の教育活動をこなすのに精一杯で、深い評価まで手が回らないのが実情だろう。ただし、本書で紹介されている簡便な評価手法を用いることは可能である。これらの方法を用いて評価すれば、環境教育プログラムが改善され、児童・生徒により効果的な学習機会を提供することにつながる。

たとえば、『ロジックモデルとセオリー・オブ・チェンジがある。ロジックモデルとは、インプット(資源、人材など)、アウトプット(活動内容など)、アウトカム(短期、中期、長期的変化)を図式化したものである。セオリー・オブ・チェンジも、ロジックモデルと同様にそのプログラムが目指す変化を示す図であるが、解決すべき問題、問題が引き起こされている原因、解決するための変化の関係性を具体的に明記している点に違いがある。』いずれも図式化することによって、頭のなかを整理することができる。

評価は、環境教育プログラムの事前、中間、事後で行うのが分かりやすい。時系列で評価することによって、環境教育プログラムが児童・生徒に及ぼす効果を明らかにすることができる。その他にも、『セオリー評価、プロセス評価、インパクト評価がある。セオリー評価とは、そのプログラムが目指している目標は達成できるものなのか、その理論的整合性を明らかにする。プロセス評価とは、プログラムのプロセスが計画どおり進んでいるかを量と質の両面から明らかにする。インパクト評価とは、そのプログラムを実施したことによる社会や個人の変化の有無について、さらに変化があった場合はその程度について明らかにする。このなかで、インパクト評価は、一般的にプログラムが実施されたグループとされなかったグループについて、特定の指標に関する差を検定するものである。具体的には、2つの対象地域(または異なるグループ)を比較する場合と、1つのグループ(対象地域のプログラムの実施前後)を比較する場合の2種類がある。評価手法は、アンケート、インタビュー、参与観察がある。分析方法は、単純集計、統計解析、テキストマイニングがある。テキストマイニングは、無料のソフトウェアがいくつか存在するので、気楽に試することができる。なかでも有名なものが、KH Coderである。』

本書は、最新の学術的知見を含み、今後の環境教育プログラムを実践する上で大いに参考になる。今から環境教育プログラムを始める者だけでなく、すでに開始している者、あるいは終了した者にとっても参考になるだろう。著者は、日本に評価の文化が根付くことを強く期待している。『環境教育の評価に関する研究は、アメリカを中心に蓄積されている。日本でも、もっと気楽に、もっと手軽に評価が行われ、プログラムの達成度や課題をもっと自由に共有できるような、評価の文化が生まれていくことを願っている。評価の文化が根付けば、結果を踏まえて、全国で行われている環境教育プログラムが改善されていく。より社会や人々のニーズに合った環境教育プログラムが行われるようになり、環境教育の意義が広く浸透するとともに、最終的には持続可能な社会の構築、そして人類が直面する環境問題が解消されることを願ってやまない。』併せて、イギリスではEEF¹、アメリカではWWC²により盛んに行われている

エビデンスに基づく教育を、日本でも研究・実践することが重要と思う。本書で学んだ方法を用いて環境教育プログラムを評価することにより、エビデンスが蓄積されることが期待される。

私は、自然科学を専門としているため、評価と言えばインパクト評価を指すと認識していた。しかし、本書により評価にはいくつかの種類があり、誰が何のために評価するかによって、評価方法を取捨選択しなければならないことが分かった。私は、今春から農業高校の教員になったので、本書で学んだ環境教育プログラムを実践したいと思う。

¹Education Endowment Foundation, ²What Works Clearinghouse

(福井県立若狭高等学校 松井明)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 北島 薫 2024.3～2026.3

業務執行理事

（副会長・次期会長候補）

日浦 勉 2024.3～2026.3

（専務理事） 内海 俊介 2025.3～2027.3

（庶務担当） 半場 祐子 2025.3～2027.3

（会計担当） 山尾 僚 2025.3～2027.3

（出版担当） 久米 篤 2024.3～2026.3

（男女共同参画） 木村 恵 2024.3～2026.3

（情報/INTECOL） 村岡 裕由 2024.3～2026.3

理事（2024.3～2026.3）

相場 慎一郎 石濱 史子

森 章 小林 真

東樹 宏和 竹垣 毅

工藤 岳 土居 秀幸

西廣 淳 中野 伸一

吉田 丈人

監事 黒川 紘子 2024.3～2026.3

立田 晴記 2025.3～2027.3

代議員（2023.12～2025.12）

全国代議員 相場 慎一郎 赤坂 宗光

石川 麻乃 石濱 史子

内海 俊介 大澤 剛士

小野田 雄介 角谷 拓

工藤 岳 佐竹 暁子

佐藤 拓也 土居 秀幸

東樹 宏和 西廣 淳

森 章

地区代議員 小林 真（北海道） 占部 城太郎（東北）

飯島 勇人（関東） 安藤 正規（中部）

丑丸 敦史（近畿）

三村 真紀子（中国・四国）

竹垣 毅（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 富松裕

Deputy Editor-in-Chief 兵藤不二夫

Associate Editors-in-Chief

Ming Dong 藤井 佐織

今井 伸夫 稲垣 善之

井上 智美

川津 一隆

松崎 慎一郎

及川 真平

阪口 翔太

横川 太一

石川 尚人

Bo Li

中路 達郎

大澤 剛士

角田 裕志

横溝 裕行

Handling Editors

馬場 友希

Min Cao

Jae Chun Choe

Franck Courchamp

Stuart J. Davies

Guillaume Echevarria

Jingyun Fang

Yunting Fang

Jan Frouz

藤木 大介

深澤 圭太

福井 大

福島 慶太郎

Raghavendra Gadagkar

Rebecca Gladstone-Gallagher

半場 祐子

平田 竜一

日浦 勉

Brenden Holland

Sun-Kee Hong

市栄 智明

井田 崇

飯田 碧

David W. Inouye

上條 隆志

加藤 知道

Eun-Shik Kim

北村 俊平

小林 和也

工藤 洋

松井 一彰

松尾 奈緒子

村上 正志

中村 誠宏

仲澤 剛史

Tsewang Namgail

西村 欣也

仁科 一哉

Ariel Novoplansky

大橋 瑞江

大園 享司

Pil Sun Park

Nishanta Rajakaruna

Serena Rasconi

Sergio R. Roiloa

Samuel R. P. -J. Ross

斎藤 琢

坂田 ゆず

佐々木 雄大

佐藤 一憲

佐藤 拓哉

Stephen D. Sebestyen

Bo Song

Janne Sundell

鈴木 紀之

高田 まゆら

高田 宜武

高木 俊

高巢 裕之

Cindy Q. Tang

Arndt Telschow

槻木 玲美

内井 喜美子

Edward Vargo

Jihua Wu

Ping Xie

安田 仁奈

日本生態学会誌編集委員会 (2023.1～2025.12)

編集委員長 永光 輝義
編集幹事 安房田 智司 相場 慎一郎
小林 剛
編集委員 伊東 明 三宅 崇
高田 宜武 箱山 洋
村上 貴弘 笠原 玉青
大澤 剛士 山浦 悠一
草刈 秀紀 嶺田 拓也
白川 勝信 東樹 宏和
佐久間 大輔 保原 達
松林 圭 立木 佑弥
富田 涼都 坂田 ゆず
竹内 やよい 都野 展子
鈴木 重雄 島野 光司

関東：亘 悠哉 奥山 雄大
中部：増田 理子
近畿：中井 克樹 古賀 庸憲
中国・四国：岡 浩平 比嘉 基紀
九州：久保田 康裕 高嶋 敦史
平田 令子
専門別委員 増沢 武弘：高山・亜高山
竹門 康弘：陸水
伊谷 行：海洋
久保田 康裕：熱帯・亜熱帯
横畑 泰志：寄生生物
阿部 晴恵：遺伝子
常田 邦彦：鳥獣管理
矢原 徹一：海外渉外
安溪 遊地：エネルギー問題
角野 康郎：湿地
水谷 瑞希：MAB
五箇 公一：環境行政（外来種）
村上 興正：環境政策（外来種）
若松 伸彦：環境政策（自然公園）
神山 智美：環境法
Peterson Miles Isao：環境法

保全生態学研究編集委員会 (2024.1～2026.12)

編集委員長 大澤 剛士
編集幹事 丑丸 敦史 小池 文人
宮崎 佑介
編集委員 天野 達也 赤坂 宗光
石濱 史子 市野川 桃子
岩井 紀子 大澤 隆文
片山 直樹 角谷 拓
河口 洋一 岸本 康誉
北村 亘 楠本 良延
久保 雄広 小池 伸介
五箇 公一 小山 明日香
今藤 夏子 佐伯 いく代
佐々木 雄大 曾我 昌史
高田 まゆら 立原 一憲
露崎 史朗 東城 幸治
戸田 光彦 中濱 直之
根岸 淳二郎 松崎 慎一郎
宮下 彩菜 森田 健太郎
山浦 悠一 横溝 裕行

将来計画専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長 塩尻 かおり
副委員長 小泉 逸郎
委員 辻 和希 巖佐 庸
石井 励一郎 佐竹 暁子
三木 健 北島 薫
彦坂 幸毅 黒川 紘子
土居 秀幸 山道 真人
佐藤 拓哉 石川 麻乃
大竹 裕里恵 藤岡 春菜
矢原 徹一 鏡味 麻衣子
宇野 裕美 Jasmine Kass
京極 大助

自然保護専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長 関島 恒夫：気候変動対策と環境影響評価
副委員長 和田 直也：中部
幹事 大久保 奈弥：海洋
地区選出委員
北海道：露崎 史朗 早矢仕 有子
東北：高橋 雅雄 黒沢 高秀

生態学教育専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長 丑丸 敦史
副委員長 平山 大輔
非教育学部系梓
畑田 彩 中田 兼介
宮田 理恵
教育学部系梓

	(平山 大輔)	三宅 崇
	(丑丸 敦史)	中井 咲織
	佐賀 達矢	
高校教員枠	矢追 雄一	藤井 新次郎
博物館枠	澤邊 (中村) 久美子	小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長	中村 誠宏	
委員	石原 正恵	伊東 明
	内海 俊介	黒川 紘子
	木庭 啓介	村岡 裕由
	中野 伸一	大手 信人
	斎藤 琢	

生態系管理専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長	西田 貴明	
副委員長	西廣 淳	
幹事	高川 伸一	伊藤 浩二
委員	赤石 大輔	上野 裕介
	大澤 隆文	大野 ゆかり
	大脇 淳	小笠原 奨悟
	鎌田 磨人	佐々木 章晴
	白川 勝信	高村 典子
	古田 尚也	松田 裕之
	山下 慎吾	矢原 徹一
	吉田 丈人	笠田 実
	河内 香織	多賀 洋輝
	長谷 和子	

野外安全管理専門委員会

委員長	石原 道博	2024.4～2026.3
委員	鈴木 準一郎	2024.4～2026.3
	粕谷 英一	2024.4～2026.3
	北村 俊平	2024.4～2026.3
	飯島 明子	2025.4～2027.3
	中島 啓裕	2025.4～2027.3
	佐藤 拓哉	2025.4～2027.3

キャリア支援専門委員会 (2024.4～2026.3)

委員長	上野 裕介	
副委員長	高野 (竹中) 宏平	
委員	河内 香織	鈴木 智之
	曾我 昌史	西田 貴明
	宮脇 成生	小泉 逸郎

荒木希和子	諸澤 崇裕
成田 あゆ	満行 知花
村中 智明	本郷 峻
池本 美都	谷口 裕美

Firouzeh Javadi

(オザパー)	可知 直毅	黒瀬 奈緒子
	塩尻 かおり	富田 基史
	半場 祐子	三宅 恵子
	別宮 (坂田) 有紀子	寺田 佐恵子
	幸福 智	東樹 宏和
	木村 恵	鈴木 牧

情報交流支援専門委員会 (2025.4～2027.3)

委員長	村岡 裕由	
委員	森田 健太郎	津田 吉晃
	深谷 肇一	上野 真由美
	岩田 容子	

大会企画委員会

委員長	門脇 浩明	
副委員長	北村 俊平	
運営部会	伊藤 公一	小黒 芳生
	太田 菜央	池川 雄亮
	橋本 洸哉	立木 佑弥
	田邊 晶史	
シボジウム部会	槻木 玲美	今藤 夏子
	佐藤 永	石塚 真太郎
	栗和田 隆	楊 偉
	大久保 祐作	亀山 慶晃
	武田 和也	今田 弓女
	田村 大也	平田 晶子
ポスター部会	松村 健太郎	高木 俊人
	小林 慶子	清野 達之
	青柳 亮太	長谷川 成明
	永濱 藍	田路 翼
	松葉 史紗子	池上 真木彦
	山口 諒	高木 俊人

ジュニアポスター部会

辻 冴月	大竹 裕里恵
中林 雅	松本 哲也
宮崎 祐子	佐藤 安弘
川津 一隆	矢追 雄一
山崎 曜	
発表編成部会	大庭 ゆりか
	福井 翔

英語口頭発表部会

Jamie M. Kass 鄭 峻介

内田 義崇

オンライン部会

山北 剛久 深谷 肇一

(オプザバー) 高橋 一男

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞候補者選考委員会

門脇 浩明 瀧本 岳

深野 祐也 工藤 洋

深谷 肇一 山口 幸

自然史研究振興賞候補者選考委員会

市岡 孝朗 塩尻 かおり

生態学琵琶湖賞運営委員会

委員長 中野 伸一

委員 占部 城太郎 中村 太士

大手 信人 中井 克樹

徳地 直子 東 勝（滋賀県副知事）

北島 薫 (生態学会会長)

日浦 勉 (生態学会副会長)

内海 俊介 (生態学会専務理事)

大会運営改革特別委員会（タスクフォース）（2025.4～2027.3）

委員長 吉田 丈人

委員 北島 薫 日浦 勉

内海 俊介 半場 祐子

土居 秀幸 木村 恵

東樹 宏和 小泉 逸郎

高橋 一男 門脇 浩明

北村 俊平



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 木庭 啓介

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2025 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける 2025 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

創発的研究支援事業 (JST) (1 件)、大学発新産業創出基金事業 (JST) (1 件)、環境研究総合推進費 (1 件)、科学研究費助成事業による研究 (45 件)、民間財団寄附金による研究 (7 件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2025 年度の共同利用・共同研究事業 (予算措置のあるもの) として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、10 件の共同研究 a、4 件のワークショップ、2 件の研究集会を採択した。ワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

また、共同研究 b・資料利用は随時募集を行う。

4. 生態研セミナー

生態学研究センターの公式のイベントである「生態研セミナー」を毎月第三金曜日に開催している。本セミナーは、講演者と世話役の教員との協議によって、(1) 生態学研究センターにおけるセンター外の方々も参加可能な対面形式か、(2) Zoom などを用いたオンライン講演のいずれかの形で開催する。どちらの場合も、講師の同意が得られる場合には、Zoom などを用いた外部へのオンライン配信も併せて行う。オンライン配信実施の可否はそれぞれのセミナーで異なるので、詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。生態学研究センターにて開催の対面形式のセミナーへの参加を希望される場合、会場への道順はセンターのホームページで確認いただけます。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、年 2 回 (7 月、1 月) 発行する予定である。原則として冊子体の発行はせず、センターのホームページにて内容を公開し、希望者には発行のお知らせをメール配信する (次頁にメール配信登録の URL 掲載)。ただし、公的機関等へは冊子体版をお届けする。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

3 月 25 日に、大学院入試案内のためのオープンキャンパスを開催した。

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として秋頃に、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。日程などはセンターホームページに掲載し周知する。

7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計 2 台が稼働している。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地 (下阪本) に係留されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シーケンサー等関係：工藤・本庄
安定同位体関係：木庭
シンバイオトロン関係：山尾
観測船関係：合田・赤塚
実験圃場林園関係：工藤・松本・吉浪

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

● 2025 年度 共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧 ●

申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
東川 航	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所 九州支所 森林動物研究グループ	共同研究 a	里山に生息するトンボ類数種の食性解析
石田 卓也	広島大学・大学院先進理工系科学研究科	共同研究 a	硝酸・リン酸安定同位体比の同時分析を可能にする膜型パッシブサンプラーの開発
堀井 幸子	水産研究・教育機構 水産資源研究所 海洋環境部 暖流第3グループ	共同研究 a	黒潮の窒素は亜熱帯モード水の硝酸塩プールに寄与するのか？
服部 祥平	南京大学・国際同位素效应研究中心 (ICIER)	共同研究 a	安定同位体分析による氷河生態系の窒素およびリン循環の解析
Antony Dodd	John Innes Centre-Cell & Developmental Biology-Group Leader	共同研究 a	Responses of plant circadian clocks to spatial heterogeneity in the microenvironment
大崎 晴菜	名城大学・農学部	共同研究 a	植物群集の空間構造が調節する植食者の進化と個体群動態
北條 賢	関西学院大学・生命環境学部	共同研究 a	安定同位体比を用いた個体間相互作用の定量的解析
高野 宏平	長野県環境保全研究所・自然環境部	共同研究 a	クワズイモ（サトイモ科）が送粉者を誘導するメカニズムの解明
柴田あかり	福井市自然市博物館	共同研究 a	不完全な雌雄異株植物における”性の揺らぎ”メカニズムの解明
谷川 東子	名古屋大学大学院・生命農学研究科	共同研究 a	土壌を介さないリター分解プロセスにおける窒素安定同位体比の変動
中野 伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2025
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2025
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学測定支援ワークショップ 2025
工藤 慎一	鳴門教育大学大学院・学校教育研究科	研究集会	種内・種間の個体間相互作用が駆動する適応進化：微生物・植物・動物の相互作用系
谷川 東子	名古屋大学大学院・生命農学研究科 森林・環境資源科学専攻	研究集会	海岸林がもつ生物地球化学的特徴およびその生態系機能の社会的役割に関する現地研究集会



受賞者名	受賞名	受賞研究課題・受賞講演名・受賞論文等
山尾 僚	第 72 回日本生態学会大会ポスター賞 / 〈植物個体群・景観〉最優秀賞	オオイヌタデの防御形質多型に伴うフェノロジー変異は同所的な生殖隔離を促進するか
半谷 吾郎	第 72 回日本生態学会大会ポスター賞 / 〈動物と植物の相互関係〉最優秀賞	ニホンザルの地域絶滅はヤマモモの実生更新に影響を与えるのか？ - 種子散布距離の比較 -
高林 純示	第 72 回日本生態学会大会ポスター賞 / 〈動物と植物の相互関係〉優秀賞	植物間コミュニケーションの代償：ストレス下での抵抗性向上と成長抑制
篠原 直登	第 40 回個体群生態学会大会 / 個体群生態学会奨励賞	「時空間的に変化する群集集合のルール」
田中 良輔	2024 度日本魚類学会年会 / 最優秀ポスター発表賞	「両側回遊性魚類の遡上個体が持つ海洋由来資源の割合の種間・種内変異」
佐々木 陽依	Plant molecular phenology and climate feedbacks mediated by BVOCs/ ポスター賞	「The relationship between habitat climate and leaf vein pattern evolution in angiosperm trees」

センターニュース
メール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>

センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>



◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求します。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は、前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会費の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	20000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| ・ 日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・ 保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・ Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|-----------|---------|
| ・ 日本生態学会誌 | 2,000 円 |
| ・ 保全生態学研究 | 2,000 円 |

【非会員に向けた学会誌（冊子体）定期購読料】

- | | |
|-----------|---------|
| ・ 日本生態学会誌 | 5,000 円 |
| ・ 保全生態学研究 | 5,000 円 |

問合せ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631